



承前

本作は、第一部『神谷内香織は自分を知りたい』の続編にあたります。前作をまだ読まれていない場合は、下記リンクからどうぞ。

<http://p.booklog.jp/book/98662>

もふもふだった。

艶のある黄金色の豊かな毛並み。太くて柔らかい毛が海のように広がって、先端が純白に輝いている。今日見えているのは三本だ。なんでも、コンディションによって何本出るかわ変わるらしい。九本全部出たことはないとか。そっと手を回して、三本を順々に撫でていく。三本まとめると、ちょうどよい抱きまくらくらいの太さだ。ぎゅっと抱きしめてみると、尻尾の根本が身を振るようにくねる。

「ちょっと」

「え？」

「触っていいとは言いましたが、抱きしめていいとは言ってません」

「じゃあダメ？」

「まあ……少しだけなら……」

燈花の顔が赤い。もとの肌が白いから、本当に真っ赤になる。伏せた目がせわしなく動いている。それが、肉食獣としての僕の嗜虐心を煽る。

「えい」

「わっ」

僕の顔が埋まる。燈花を押し倒した先に、彼女の尻尾がクッションになっている。顔を埋めると、とっても温かい。もふもふ。

「な、何を」

毛が柔らかくちくちくと頬を撫でる。息を吸い込むと、いいにおいが頭のなかまで入ってくる。

「なんか、おひさまのにおいがするね」

「いやあの、嗅がないでください」

燈花が恥ずかしそうに身を振るけれど、僕はもふもふを離さない。横から燈花の身体を抱くようにして、左手は腰に回して、その上で尻尾を撫でる。

「僕は燈花のにおい好きだよ」

「へ、変態ですか」

「そうかもしれない」

「この変態、開きなおりやがひっ」

尻尾の根本の所を撫でてやると、燈花は変な声を出した。

「え、なんて？」

「うあ……」

尻尾が大きいから、ただでさえ燈花のパジャマのズボンはずり下がっていて、お尻が半分見えているのだけれど、そのお尻に近い尻尾の付け根や、枝分かれしている股の所に指を這わせると、燈花はぶるぶると身体を震わせた。

「ん、香織……それダメ……ホントに」

初めは恥ずかしさにくすぐったさだけだったのだろうけど、いつの間にかその声に甘いものが混じり始めた。ホントにダメだったらいくらでも逃げようはあるはずだけど、燈花は僕の腕を握る手に力を込めるだけだ。

「なにがダメなの？」

僕はもうちょっと燈花をいじめてみる。顔をもふもふさせながら、手で尻尾を弄ぶ。

「ヴヴ……意地悪すると、怒りますよ……」

「あー怖い怖い、最後までちゃんと言えてたらもっと怖かっうひあぁ！」

衝撃が背中を駆け抜けた。

何が起こったのかわからない。

身体に電気が流れたみたいに、腰がのけぞる。

「うえ、な」

一瞬遅れて何が起こったのか把握する。

燈花が僕の尻尾の根本をぎゅっと掴んでいる。

その目が妖しく光った。

「なんですか、これ。香織のお尻から、何か生えてるんですが」

それは僕の尻尾です。

狼の。

「え、何でこれ生えうぎっ」

「最後までちゃんと言えてたらもっと怖かったですね」

「別に元々こわううう」

燈花が僕の灰色の尻尾をぎゅっぎゅっと握る。握られるたびに僕の身体は跳ねる。

「まだお昼なのにこんなの生やしちゃって、どうしたんですか？」

反撃しようにも、尻尾をぐりぐりと握られると動けない。得体のしれない感覚が身体のそこでぐるぐる回って、込み上げてくる。何で夜でもないのに僕の尻尾は生えているのか。分からない。考えられない。

「ぶらぶら揺れてたのを捕まえたら引っ込むかと思ったんですけど、全然ですね。むしろこの子、すごく元気に暴れてるんですが」

僕の狼の尻尾は、燈花の妖狐の尻尾なんかよりも細くて、芯のあるやつなのだけれど、だから燈花の手でぎゅっと握れるくらいの太さなのだけれど、その分それを掴まれると、逃れられないし、身動きも取れないし、変な声しか出ないし、

「これが官能小説だったら、『香織の声には甘いものが混じり始めた』とか書かれるところですね」

完全に立場が逆転していた。しかもさっきの僕の心内語が官能小説呼ばわりされている。心外である。燈花が僕の尻尾をぎゅむぎゅむと握りこむ。時折尻尾を引っ張るみたいに撫で上げる。全身の毛が逆立ちそうだ。

「香織、これ、やって欲しかったんでしょ。だから私の尻尾で遊んだんですよ。仕返しさせるために」

燈花の顔がすぐ目の前にあって、けれど僕は顔が熱くてそれをまともに見ることは出来なくて

「そんなこふぁ、ん」

「いいんですよ。これくらいなら協力してあげます。ややこしい性癖を持ってるで大変ですね」

「ひっ、ふぁっ」

燈花が僕の尻尾をリズミカルに握る。頭がカッと熱くなって、すぐにぼうっとして、わけがわからなくなってきて、何かが迫ってきて、

「あ、こっちも出てますね」

そう言って燈花が顔を持ち上げる。え、と思った次の瞬間。

「んんっぁぁ」

脳味噌を内側からなぞられたようなぞわぞわする衝撃。

「耳も出ちゃってますよ、狼さん」

僕の頭に生えた狼の耳に、燈花の息がかかる。

「ふーってされるのも、好きなんですか。やっぱり変態さんですね」

もう一回、ふーっ、が来る。尻尾を掴まれ、耳に息を吹きかけられているだけなのに、全身を無数の手で撫で回されているような感覚。

「この耳、美味しそうですね」

燈花が僕の狼の耳を唇で弄ぶ。

「ちょっとコリコリしてて」

僕はもう言語になっていない声しか出せない。尻尾を揉みほぐすように握られる。握るのが強くなって、

「知ってますか。妖狐に噛まれると、魂が抜かれてしまうんです」

そんなの知らないぞ。

「ローカルルールです」

ローカルルールだった。

「私もやったことないですが、せっかくなので、香織の魂をここから抜いてあげます」

意識がいっぱいになっていく。よくわからないものでいっぱいになっていく。燈花が僕の耳元で囁く言葉が、脳に直接入ってくる感じ。

「まあ、妖狐的なやつはわかりませんが、ある意味香織の魂はそれで十分抜けそうですし」

はぁぁ、と僕の耳に覆いかぶさるように燈花の口が開くのが分かる。尻尾がぎゅううう、と掴まれる。

かぶり。

「ーッ！」

跳ね起きるとカメラと目が合った。

絶望の朝。

時計を見ると十一時半だった。

昼だった。

絶望の昼。

僕は、夜間自己監視用のカメラのメモリーを削除した。

トーストを焼いてバターを塗り、目玉焼きを作ってケチャップをかけて、ゆっくりとそれを食べた。

じっくりと豆を引いて、濃い目に淹れたコーヒーに、砂糖とミルクをたっぷり入れて、ちびちびと飲んだ。

お皿を洗って、全てを片付けると、もう一度ベッドに潜り込んで、「死にたい……」と言った。少し泣いた。

あと一ヶ月くらいは引きこもらないとな、と思った。

梅雨が来る前に夏が来てしまったかのような暑い日でした。

あまり暑いのは彼女にも良くないでしょう。私は冷房をつけました。

彼女は今、人間の顔をして横たわっています。包帯を先ほど変えた時には、もう肩の傷はほとんど治っていました。狼であるときに負った傷は、すぐに治ってしまうものなのかもしれません。傷は境界をまたがない、母はそんなことを言っていました。

私は彼女の額に貼った冷えピタの具合を確かめます。そろそろ取り替えたほうがいいでしょうか。

綺麗な顔です。化粧っ気のない、整った目鼻立ちと顔の輪郭。これだけ短い髪型が似合うのは、顔そのものが十分に綺麗だからだな、と私は思います。私は怖くてこんなに短くすることは出来ません。この短い前髪では、世界が見えすぎてしまうのではないのでしょうか。

その綺麗な顔が微かに動きます。

「起きましたか」

「……燈花？」

「はい」

「ここは」

「私の家です」

「……」

香織はまだ意識がはっきりしてはいないようです。

「香織」

「うん……？」

「昨日は激しかったですね」

「え」

香織がガバッと布団を持ち上げて自分の身体を確認しています。確認……何を……。

「あ」

「香織？」

「あああっ！」

跡は残さないようにしたので、何も発見されないと思うのですが。

「燈花！ 僕、僕は君を……！」

「ああ、そっちですか」

「え、他にどっちが」

「まあ、それはいいです」

「よくな」

「事情を説明しましょう」

私は昨夜について語りました。

あの夜。

満月の夜。

私が、香織に化けた私が香織を呼び出した夜。

獣化した彼女に私はもう少しのところで襲われるところでした。しかし、あの僅かな間に、多くのことがほとんど同時に起こりました。

まずは香織が肩を撃たれました。どこからか響いた銃声と共に、彼女の肩は弾丸に貫かれ、衝撃で香織はもんどり打って倒れました。

一瞬遅れて、母が現れました。母は苦しむ香織を素早く眠らせて、周囲に煙幕を張りました。私にはそこまでのことは出来ません。どうも、これは血の比率の問題のようです。母は公園の木影で香織を軽く止血し、そのあと私と母は香織を家に運びました。

「え……僕をどうやって運んだの」

「私と母で運びました」

「どうやって？」

「南北線と目黒線で」

「その時の僕の身体は？」

「まだ狼でした」

「南北線と目黒線で？」

「白金高輪で乗り換えました」

香織は頭を抱えました。

「まあ、母と一緒にしたので、大丈夫です」

「大丈夫じゃないよ……」

「いえ、母は私よりもより本物ですから。『アシキ』ですし」

「猟友会のおじさんにでも化けてたの？ いや、それでも手負いの狼は地下鉄に乗れないと思うんだけど……」

「香織は妖狐の力を甘く見てますよ。化けるんじゃないありません。化かすんです。終電近くでサラリーマンの皆様は疲れていますし、ケージに入れた小型犬を運んでいるようにしか見えなかったのです」

それでも少し変かもしれませんが。終電近くの南北線と目黒線でケージに小型犬を入れて運んでいる女性二人というのは。

「痛みますか」

香織は包帯を巻かれた肩に反対の手をやります。

「ん……たいしたことないかな。多分すぐ治るよ、これ」

「普通の痛み止めですけど、飲んでおいてください」

枕元に置いておいた錠剤を彼女に渡す。

「ありがとう……それより、いくつか質問していい」

「ええ。香織が寝ている間に私が何をしたか以外なら、なんでも質問してください」

「僕が寝ている間に何をした」

「何のことでしょう」

私は携帯電話を握りました。香織を着替えさせるときについたくさん写真を撮ってしまいましたが、まあバレません。

「とぼけるな」

「もう一度して欲しいですか？」

「やめろ」

「考えておきます」

「で。お母さんと呼んだって、どうやって？」

「これです」

私は懐から防犯ブザーを取り出しました。

「防犯ブザー？」

「はい」

「女子小学生か」

ピンク色のかわいらしいやつだった。

「いやいやこのアイテム、見た目は防犯ブザーにしか見えませんが、実際のところ防犯ブザーです」

「防犯ブザーじゃねえか」

「最近は何騒ですから」

「女子大生が持っていると逆にあれな方向に物騒な感じがするよね」

「わるい狼にいつ襲われるとも限りませんから、持たされているのです」

「う」

「羊の顔していても心の中は」

「すみませんでした」

「わかればいいんですよ」

「それで」

「はい」

「もう一つ聞くけれど」

「はい」

「僕を撃ったのは誰」

「それは」

私は言い淀みました。

言い方を間違えれば、彼女を余計に刺激してしまったり、余計に怖がらせてしまったりするかも知れず、私には準備をする時間が少しだけ必要でした。

「その質問には」

けれど、その必要は強制的に無くなってしまうようです。

「儂(わし)が答えよう」

音もなくいつの間にか部屋に入ってきていたのは、私よりも背の一回り小さな『女の子』。
金色の長髪に幾筋か純白の束が混じる、本来ならば異様そのものと言えない色彩。
肌は白く、瞳は黄金。

その二色で塗り分けられた世界。

「え」

香織が驚いて声を上げました。当然です。

「部屋にはいるときはノックしてって、言ってるじゃないですか、お母さん」

「お母さん!？」

香織が驚いて叫びました。当然です。

母は普段から十歳くらいにしか見えません。実年齢はけっこう上です。少なくとも同年代の人の両親よりも（つまり、たとえば香織のお母さんなんかよりも）ずいぶん上であるはずですよ。

「ああ」

お母さんが頷いて言います。

「稲荷木二色(にしき)。燈花の母じゃ」

「母です」

「いつも娘が世話になっとるようじゃの」

「いやいやいやいやいや」

香織は全力で手をパタパタしました。

「女子小学生か」

「見た目は女子小学生にしか見えませんが、実際のところ女子小学生です」

「女子小学生じゃねえか」

「女子小学生ではない」

女子小学生ではありませんでした。

「小学校は出ておらんの」

さすがの香織も固まっています。

「神谷内香織、と言ったな。おぬし、獣の姿で外を出歩いたことはあるか」

母はニヤニヤと笑みを浮かべて、問います。

「おぬし？」

「おそらくほとんど無い、じゃろうな」

「え、流すの？ おぬしでいくの？ のじゃなの？」

「おぬしを撃ったのはな、十中八九、狩人じゃよ」

香織はその単語に顔をしかめました。

私はまた、香織の寝顔を見つめていました。

エアコンの微かな駆動音と、時計のカチコチ言う音だけが部屋に響きます。母はまた出かけてしまったようです。

冷えピタがそろそろ冷えでもピタでもなくなっているように思います。冷えピタが冷えなくなったらただのピタ。冷えピタがピタでなくなったらただの冷えです。冷えだったりピタだったりしたらまだ戦えるでしょうが、しかし、冷えピタが冷えでもピタでもなくなってしまったとしたら、それはもう無です。無。取り替えましょう。私は冷蔵庫で冷やしておいた冷えピタを取り出します。香織の枕元に戻って、彼女の額に手を伸ばします。

香織と目が合いました。

「起きたんですか」

「起きた」

「そうですか」

かまわず額の冷えピタを取り、

「いいよ」

香織が私の手を払って、身体を起こしました。

「まだ寝て」

「大丈夫」

「ですが」

「もうだいたい治ったし、少なくとも熱はないよ」

香織が自分で冷えピタを剥がします。

間違えました。

香織が自分で無を剥がします。

「洗面所借りていい」

「そこに服がありますよ」

「ああ、ありがと」

香織には、私の寝間着を適当に着てもらっていました。元の服はボロボロになってしまったので。私の寝間着のまま帰るといってもいかず、あの服を着てもらうことになります。

洗面所から、冷たい表情が出てきました。

「この服、なに」

「よく似合っていますね」

完璧です。赤いネクタイにブラウンのジャケット、それと合わせたパンツルックは、いかにも彼女が着ていそうな服装です。

「私の変装のために買った服？」

「いえ、変な気まぐれを起こして似合わないだろうとはわかりつつもちょっと買ってみたらやっぱり私には似合わなかったのでもっておいた変装用の服です」

「変装用じゃねえか」

「私、まだ下手なので、服まで作り変えるのはちょっと自信がなくて」

「そこまで準備をしてねえ……」

そうつぶやいて、香織は枕元に置いておいた携帯電話と家の鍵を拾います。

私の方を見てはくれません。

昨夜と同じ気配が、香織から感じられます。

彼女は怒っているのでしょうか。

私は何も出来ません。

「帰るのですか」

「帰る」

「もう痛くないですか」

「痛くないよ。ありがとう、お母さんにもお礼言っといて」

香織が離れていきます。香織が玄関で、靴を履きます。ドアを開けます。

「香織」

「うん」

「……ごめんなさい」

「君は、ずるいね」

香織はそう言って、部屋を出て行きました。

香織が出て行ってからしばらくたちました。私は香織が眠っていた布団を洗濯しました。自分に対する罰のようなものだったのかもしれないと思います。いや、なんかよくわかりませんが。

あの冷たい目は、冷たい声は、やっぱり怒っていたのだと思います。

私はまずいことをしてしまったのでしょうか。

してしまったのでしょうかね。

香織に化けるということで、香織を知ったような気持ちになって、けれどもその実、私は彼女のことはずっと何にも知らなかったのです。

あれ、順番がおかしいですね……。

本当は、香織のことが知りたくて、けれど知ることができないから、余計に知りたくなったのです。彼女は、何を考えているのかわからないところがあります。心の奥底がどうなっているのか、わからないところがあります。普通の人よりも、おそらくは、血筋の関係で、人の中身が見えやすい私にも、彼女は見えません。だから知りたくなった。

だから……だから、目的と手段がぐるぐると回っていて、そのうちに私は香織を怒らせてしまったようです。

母はまだ帰ってきません。母なら全部、何もかも本当に全部、見えてしまうのでしょうか。

さっきの母と香織との間の会話を思い出します。

獣の姿で外を出歩いたことがあるか、と問われた彼女は答えました。

「僕は……ありません。獣の姿になる時は、自分一人の場所で、安全を確保するように、言われました」

「そうじゃろう、それが半人半獣としての賢明な習慣じゃ。おぬしも境界を行き来するモノじゃからな。境界を超える瞬間というのは無防備じゃ。特に気をつけねばなるまい」

母は満足気ににんまりとしました。まあ、大体いつもそんな表情ですが。そういう人なので。

「ところでおぬし」

「いや、だからおぬしってさすがに」

「誰に、そう言われた？」

香織は答えませんでした。その時の彼女の視線の動きは、私が想像を巡らすのに十分な材料でした。

母によれば、彼女は『狩人』とやらに命を狙われているそうです。いろいろなことが同時に起きたせいで、私は少し混乱しています。けれど多分、香織が命を狙われているということは、きっと客観的には一大事のように思われます。

「お母さん」

眠ってしまった香織を見届けて、家を出ていこうとする母に私は問いました。

「香織は、誰に狙われているのですか。狩人って、何ですか」

「獣を追うものは狩人じゃ。狩人だから獣を追っているわけじゃあない」

「そういうことじゃなく」

私は自分の口から出た言葉の響きが、自分で思っていた以上にきつくなってしまったことに驚きました。

「……ふふ、そうじゃな、ふざけている場合ではなかったか」

母は金色の瞳を揺らして笑い、私はなんだか恥ずかしくなりました。

「しかし正直、今回は儂も直接姿を見たわけではないからのう。可能性が多すぎてなんとも言えぬ。かと言って、探すわけにもいくまい」

「けれど、一体その狩人というのは、何のために香織を」

「手がかりがあるとすればそこじゃな。問うべきは狩人が何者かではない。この狼娘が何者かじやろう」

私は香織を見下ろしました。静かに寝息を立てる彼女から、今は獣の臭いはしません。

「知らんのか？ 友達なのに」

母がからかうように言います。

知らないから、友達なんです。

そうして私たちはすこし話をしました。

「私は……私には、香織のことはよくわからないのです」

私は言いました。

「時々、彼女が何を考えているのか、わかりません。そのせいで、昨日も、さっきも、香織を怒らせてしまった」

「まあ、怒らせたというか……」

母がニヤニヤしながら言いました。

「燈花、お前は儂ほどに人の心が見通せるわけではないのじゃがな」

そうです。当然、血が半分なわけですから。

「しかし、お前、他人が理解できなかった時に、血のせいにするのは、違うぞ」

「え」

「なんであの狼娘が怒っていたのか、分からない理由を、血の不完全さに求めているとすれば、それは滑稽じゃ」

フヒッと母は笑いました。やめてほしい。

さすがにこの人は、人が言われたくないことを一番よくわかっている。人が一番言われたくないことを、人が一番言ってしまうことを、知っている人。

「あれはな、正直、友達が何のアピールかよくわからないけれど自分に変身して変装してまで言い寄ってきたことへの――」

「そ、それ以上良くない」

「――ドン引きじゃよ」

私はがっくりと膝をつきました。

床に落ちていた冷えピタ、じゃなかった、無が、気持ち悪く膝にくっつきました。

瀬戸内産しらすの和風スパゲッティを食べる。

なんだかんだ言ってお腹が空いていた。狼の姿でとはいえ怪我をした以上、その回復にエネルギーが必要だったのだろう。ずっと眠っていた割には、そしてモヤモヤと晴れない気分の割には、食欲だけはあった。食欲だけがあった。

もう今日は料理なんてする気も起きなかったし、こうして非常手段のファミレスを解放しているけれど、明日からはしばらく引きこもろうと思った。タジマで食料を大量に買い込まなくては……。

僕のドッペルゲンガーのことを考えた。

それは実はドッペルゲンガーなんかではなく、稲荷木燈花という、奇妙な女の子だった。僕の気を引くために僕に化けた。僕が自分自身に執着していることを見抜いて、だから僕に化けて、けれども僕が自分自身を恐れている理由は見抜けず、というか考えもせず、満月の夜の僕の前に現れた。

あの時より、少しは冷静になっている。

と、思う。

しかし冷静になってもやっぱり、燈花の行いはかなり自分勝手に思われた。自分のドッペルゲンガーがうろうろしているというのは、僕のような特殊な場合でなくたって、普通に考えて、愉快ではないだろう。

そんなことをわざわざ実行に移してしまう燈花はどうかしていると思う。

この瀬戸内産しらすの和風スパゲッティ、しらすの香りがあんまり効いていないな、と思って、江ノ島で食べた二食しらす丼のことを思い出した。燈花は僕のことをしらす知識が欠如していると詰った。僕のしらす知識が多少はついたから、ファミレスのしらすでは満足できなくなっているというのだろうか。

しかし……。しかし、彼女は、そんなことを、わざわざ実行に移した。

同じところを考えが堂々巡りして止まらなかった。

まあ、考える時間はたっぷりあるさと僕は思った。狼の姿でなければ別に狙われたりしないだろうけれど、でもできるだけ外に出ないほうが良い。しばらくは引きこもり生活をするつもりだった。

休もう。

考えよう。

よく眠ろう。

いい夢が見られたら良いな、と僕は思った。

ゼミ室への階段を登りつめると、胃が気持ち悪くうねりました。不安七割、期待三割といったところでしょうか。

「おはようございます」

寒気がしました。

ゼミ室にいたのは草苺さん、一人だけでした。

「おはよう」

「エアコン、つけたんですか」

部屋に取り付けられた大型のエアコンが鈍い音をたてて、部屋に冷たい空気を吐き出しています。節電で利用禁止だったと思いましたが。

「さすがに暑すぎるから」

「まだ五月ですが」

「許してよ。こうも暑いと勉強にならないもの。私、最近体温調節が苦手で」

「はあ」

だったら図書館とかで勉強しろという話だと思いますが、私は言わずにおきました。ゼミ室のほう落ち着くというのはわかります。

「ああ、でもごめんね燈花、急だったから連絡できなかつたんだけど、今日のゼミは休みね」

私の胃は不安七割の方向に向かって落ちました。

エアコンが鈍い音をたてて、私に冷たい空気を吐き出して来ます。寒気がしました。

「休み、ですか」

「発表者不在だから」

「今日の発表者は」

「知ってるでしょ。あなたの次。香織」

「休み、なのですか」

「しばらく休みます、って一言だけ来たよ。具合悪いのかって聞いたけど、返信も来ない」

私には、一言も来ていません。

「悪い子だねえ。学校には、死んでも来なきゃ」

草苺さんはそんなことを言って、気だるそうに自撮り棒をいじりました。自主ゼミはそこまで重要だったのででしょうか。しかし、そんな言葉も、私の頭には入ってきませんでした。

だって。

私には、一言も来ていません。

結局その日から。

神谷内香織は大学に一切姿を見せなくなりました。

サバティカルではありませんでした。

私はいよいよ行動する必要があると思いました。

一人になった部屋で、これから私は電話をかけます。布団の上に座って、懐からスマートフォンを取り出します。液晶の表面を指でなぞり、そのロックを解除します。

これから、私は二本、電話をかけます。

「もしもし」

だるそうな声でした。

「稲荷木です。みとはちさん、いまお話できますか」

「ああ、燈花ちゃん。もちろんできるけれど、どうしたの、電話なんて。珍しいね」

「みとはちさんにどうしてもお願いしたいことがありますて」

「燈花ちゃんが『お願い』だなんて、それこそ珍しい。面白そう」

「はい。聞いていただけますか？」

「話を聞くよ。お願いを聞くかどうかは、中身を聞いてからだね。私はなんでもいうことを聞くなんて言うほど、無責任なキャラじゃにゃから」

みとはちさんはカッコいいセリフを噛みました。

「はい。実は、藤木先生と連絡が取りたいのです」

電話の向こうに、一瞬の間。

おそらくは噛んだことを自分で拾うか迷っているのだと思います。

「……あの人と。連絡が取りたい。急ぎで？」

拾いませんでした。

「そうです。大学のメールは、どうもほとんどチェックしていないようですし、送ってもいつ返事が来るかわかりません。それに、込み入った話なので、できれば電話で話したいのです。あと、みとはちさん今カッコいいセリフなのに噛みましたね」

「鬼だな」

電話の向こうでみとはちさんが崩れ落ちる気配がしました。

鬼じゃないですよ。

狐です。

「まあ、いいや……噛みましたよ……ともかく、まずはお礼を言おう、燈花ちゃん」

「お礼」

「私がセンセーの連絡先を知っていると思ったわけじゃないよね」

「はい」

「つまり燈花ちゃんは、私ならセンセーの連絡先を突き止めることができると期待しているわけだ」

「そうです」

「ありがたい話だね」

電話の向こうで、カタカタと音がします。

猛烈な速度で。

「私がかけることができる電話番号があればベストです。そうでなくても、立ち寄った施設、例えばホテルだとか、海外の大学だとか、そういった情報が少しでもあれば、助かります。力を貸していただけないでしょうか」

「おーけー。いまやってる」

電話の向こうでなる音はキーボードでしょう。銃でも撃つみたいな連続した音。一瞬の間。また連射する音。

「この間、香港にいたことはわかっている」

「はい。みとはちはさんはあれを即座に特定したので、今回も何か分かるのではと思ってお願いしているのです。あれはどうしてわかったのですか」

「写真に映り込んだバスに、見切れ気味だったけどKMBって書かれてて」

「KMB……」

「何の略か分かる？」

「……釜めんたいバター」

「なにそれ」

「釜めんたいバターです」

「釜めんたいバター」

「香織の二つ名です」

「香織っちにそんなボリュームミーな二つ名が」

「常連だそうです」

「あ、そう……」

「すみません」

「ああ、うん、九龍モーターバスでKMB」

「なるほど」

「写真に写った町並みからは結構手がかりが少なかったよ。中国語っぽいのが写っていたけれど、まあチャイナタウンとか世界中にあるし。結局絞り込みは固有名詞が強いんだよね」

「すごいです。私はてっきり占いかと思いました」

「占いは、使わなくてもいい時には、使わないに限るんだよ。まそれにしても、香港にいたというのとは結構前の話だからねえ。今どこにいるかは改めて検討する必要がある」

「はい」

「……けれど、どうして？」

「先生と、お話したいことがあるのです」

それは答えにはなっていません。

みとはちさんの質問に、私は正面から答えていません。

「ふうん……」

キーボードの音がすつとやみました。

「香織っちのことかぁ」

この人は、本当に占い師なのだろうか、と私は思います。

「……はい」

「いいよ、詳しい話は聞かずにおくよ。何やら込み入った事情があるわけでしょう。その代わりに、いつか私が燈花ちゃんの持っている情報を必要にした時は、その時は協力してね」

「……ありがとうございます」

やっぱり、みとはちは優しい人です。

「読みあげるよ」

「え」

え？

「もうわかったのですか」

「さすがに携帯の番号は無理かなあ。だから泊まってるっぽいホテルの番号」

みとはちさんが読み上げた番号は。

国番号40。ルーマニアでした。

「幸運を祈るよ、燈花ちゃん」

あたりまえですが。私はルーマニア語がわかりません。

ホテルなら英語が通じるだろうと思って、とりあえず電話をかけてみましたが、一人目に出た人は英語がわからないようでしたし、二人目に代わってくれた人もそれほど上手とはいえず、私だって英語が上手などとは死んでも言えない出来ですから、先生につないでもらうのにたっぷり十五分を要しました。あまり都市部にあるようなホテルではないのだと思います。途中で電話を切られずに良かったものです。

「Alo.」

「もしもし、稲荷木です。藤木先生ですか」

「.....稲荷木くん？」

それは紛れも無く、藤木先生の声でした。

私達の研究室のボスにして。

西洋の半人半獣伝承、特に、人狼の専門家。

「よかったです。藤木先生、突然電話をしてすみません。ご相談したいことがありまして」

「ええ。なんでこの番号分かったの。占いかなにか？」

この人も占い師なのでしょうか。変な人ばかりです。

「まあいいや、俺もちょうど、稲荷木くんにはメールでも送ろうかと思ったところだよ」

「私に、ですか」

「うん。あのゼミの資料を見たよ」

先生はびっくりすることを言いました。

しかし考えれば、自主ゼミの資料は学科のファイルサーバーに保管しています。学部生は学内からしか見られませんが、教員はインターネットから接続することもできるのでしょう。

「面白いね。君は普通の人間ではないのかもしれないとは、俺も思っていたけど、妖狐の血筋とは、恐れいったよ」

先生はびっくりすることを言いました。

今度は本当に、私は驚きました。

「普通の人間ではない、って」

あまりのことに、取り繕うことが出来ません。

「資料は語る。資料を並べる人間は、資料に語らせたがっているからだ。あの資料は雄弁に語っていたよ。稲荷木くんこそが、『アシキ』の血を引く人物であるということをね」

「どう、して」

「俺も一応、専門家なわけだから」

それは資料の専門家という意味なのか、半人半獣、半人半妖についての専門家という意味なのか、私には判断が付きません。

先生は私に息をつく間を与えません。

「あれは神谷内くんへの出題だったのだろう？ なら俺も君に出題しようかな。神谷内くんにつ

いて。彼女は君と違って、自分で自分のことを出題できないだろうからね」

私は黙ってしまいます。

「そうだね。神谷内くんのことだろう、君が俺に電話をしてきたのは。でもそれじゃダメなんだよ。俺に答えを教えてもらうというのは、なんとというか、占い師に俺の連絡先を教えてもらうのとは質的に異なる。お膳立てされたものであったとしても、自分自身で、直接答えにアクセスする必要があるんだ」

私から電話をしたというのに、一方的に先生がしゃべります。私は黙ります。勝てない相手には、黙るに限ります。

「君が心配しているとおりだ。神谷内香織は問題を抱えている。ならその問題とは何だ。彼女は何を恐れている。どうして自分自身に執着する。それを君は知らなければいけない」

「……先生」

「うん？」

「先生は、それに、その問題というのに、関与したことがあるのですか」

「ある」

「それはいつですか」

「彼女がまだ中学生の頃だ」

「何をしたんですか」

「問題を解決しようとした。あまりうまくいかなかったね」

「狼になるのを人に見られないようにさせたのも、先生ですか」

「そういうことを、確かに言ったね」

私はそれだけ確認しました。それ以上のことは、ダメでした。ルール違反なんだろうと、思ったからです。

「俺もすぐに日本に帰るつもりだ。その前に、君には自分で彼女のことを理解しておいてほしい。出題とか、偉そうなことを言ったけれど、いや本当に、これはお願いだよ」

そう言って先生は、付け足しました。

神谷内くんのことを知ってあげてほしい、と。

彼女にはきっと、理解者が必要だ、と。

問題

3. 神谷内香織は問題を抱えている。ならその問題とは何だ。

そうなのです。

私は結局、香織のことが知りたかったはずなのに、それを見て見ぬふりをして、彼女に化けて外を出歩き、何かが変わることをただ待っていました。きっとそれが、そんな卑怯なやり方が、香織を怒らせてしまったのです。

私はこれを、見て見ぬふりをしていたこの問題を、自分で解いてやろうと、そう思いました。

そして、その答えを持って、香織に謝りにいくのです。

「いらっしゃい」

薄暗い店内には、昔の怪獣特撮映画の曲が低く流れています。

「ああ、君か」

『衣装のウラヅキ』の店長さんは、白髪痩身年齢不詳のちょっとヤバい感じの男性です。

「仮装はうまくいったかな」

「ええ、良い衣装でした。……とても良い衣装でしたので」

私は、先日レンタルした『神谷内香織がいかにも着ていそうな服一式セット』をそのまま買取する旨伝えました。何しろ本人が着て帰ってしまいましたから、返却のしようがありません。店長さんは目を閉じて頷きました。

「わかるよ。僕もそうなるんじゃないかなと思っていたんだ。君がハンドバッグ一つで入ってきた時、やっぱりなと思ったんだ。わざわざ買取を伝えに来てくれてありがとう」

「いえ実は、一つお願いがあって来たのです」

「お願い？」

「はい。ここでアルバイトをしている女子大生がいると思うのですが」

「え、ああ、神谷内さん？」

「彼女について教えてほしいのです」

「うん……？ 君は彼女のファンか何かなの？」

「どうしてですか」

「いやだって、『神谷内香織がいかにも着ていそうな服一式セット』を買い取るような人が、神谷内さんのこと教えてくれって言ってきたら、そうなのかなって思うでしょう。ファンかストーカーか」

「……そうですね、ストーカーよりはファンでありたいと思います。あるいは、もっと深い関係」

冷静に考えて、今の自分の発言は犯人っぽいなと思いました。

「ははあ」

「つまりこれまで、私は彼女に私のことを知らせようと、腐心してきました。まさに不審だったわけですが。しかしともかく彼女は彼女自身のことしか見ていませんから、私には彼女になるという手段しかなかったのです。しかし今思い知らされたのは、私こそが彼女のことを何も見ていなかったという事実であり」

「来てるねえ」

店長さんは嬉しそうに笑いました。かなりやばい人だなと思いました。

「神谷内さんとはどこまでいったの？」

「Uまでです」

「なるほどね」

本日も北陸新幹線をご利用いただきまして、ありがとうございます。この列車は、かがやき号長野経由金沢行きです。全車指定席で、自由席はございません。

私はグリグリとスジャータのアイスにスプーンを突き立てました。硬すぎます。まだ早い。急いで事を仕損じるぞ。祖父が幼い私によく言った言葉です。

諦めて鞆の封筒から書類のコピーを取り出します。履歴書。これコピーさせてもらって良かったのでしょうか。いや絶対駄目です。個人情報そのものです。

氏名 神谷内香織

生年月日 平成×年×月×日

現住所 東京都北区×××××

学歴

平成××年 ××県立錦ヶ丘中学校卒業

平成××年 茗溪女子大学附属高等学校入学

平成××年 同卒業

平成××年 東央大学文学部人文社会学科入学

出身高校についても出身地についても私は本人から話を聞いたことがありますが、改めて履歴書の上で見ると、やや珍しい経歴であると言えるでしょう。茗溪女子大付属は国立にして小学校からの一貫教育校です。調べた所、高校での内部進学 of 比率は八割近く、そこに受験して入るのは相当狭き門のようです。まあ、聡明な彼女ですから、それはいいのですが、重要なのは常に、動機です。

なぜ、東京の高校に進んだのか。

東京の大学に行きたいという気持ちは説明がつくでしょうが、東京の高校というのは。北陸から飛び出してくるのには遠すぎやしないでしょうか。親の事情でしょうか。しかし彼女は一人暮らしです。

それほど中学校でなにか、重大なことが、あったのでしょうか。

藤木先生の言葉を思い出します。先生は、彼女の問題に関わったのは、彼女が中学生の頃だと言っていました。

それが中学校であった、重大なことなののでしょうか。

その程度の直感で、私は新幹線に乗っています。まあ、スジャータのアイスが食べたかったからというものもあります。私はアイスにスプーンを滑らせました。薄く削られたアイスの表面を口に運び、私は微笑みます。急くほどに美味しくなるのです、と私は祖父に反論します。祖父なんて会ったこともありませんが。

履歴書が手がかり一であるとすれば、手がかり二は私の携帯電話の中にあります。
さて、手がかり二を画像フォルダから探しましょう。

「あれ、七尾先生？」

「どうしたの、宇野気さん」

三組の女子生徒。宇野気かほ。明るくてクラスの中心人物。成績も悪くはない。

「さっき、職員室にいませんでした？」

錦ヶ丘中学校の職員室は校舎本棟一階の中央部分。ここは別棟の二階に上がる階段だ。

「そりゃあ、いるわよ。先生だもの」

「そーだけど。そうじゃなくて」

宇野気は階段で足踏みした。社会科教師の私を調理室で見かけた、というのならまだしも、職員室で見かけた、というのはごく当たり前の話だ。

「先生、速くない？ だって私、職員室からここまで走ってきたのに、先生のほうが先にいるんだもん」

「学校の中で走らないの」

「あ、はい」

えへへ、と頭をかく。宇野気は陸上部だ。小さくしなやかな身体でグラウンドを駆ける姿はハツラツとして素敵だけれど、廊下で走るのには感心しない。

「先生は普通に歩いてきただけよ？」

「えー？ 先生も実は走ったんじゃない？」

「走ってません」

子どもは時々変なことを言う。思春期に入り、大人たちとの距離のとり方、間合いの測り方に悩む時期なのだと思う。宇野気は人懐こく距離を詰めるけれど、こういうどこへも行かない雑談だって、その一つの子供らしい策なのかもしれないと私は思う。

「本当に、廊下や階段で走ったら駄目だよ。誰かを怪我させたら大変だし、あなた自分も今怪我したら困るでしょう。大会、近いんでしょ。頑張ってるね」

「はーい」

口ではそう言いながら、けれど僅かに表情を明るくさせて、宇野気は階段を駆け足で上っていった。

.....すぐに気づいて早歩きに変えた。

「あ、そうだ宇野気さん」

階段を登り切った宇野気が回転する。

「なあに、先生」

「あなたは、この学校の狼の話、聞いたことある？」

「へ？」

どんな学校にも、七不思議の一つや二つ、あるものである。七つはないこともある。大抵の場合、「七不思議を全て知ると死ぬ」という設定があるため、情報は集約されず、五つくらいまでしかなかったり、逆にどう考えても十を超える不思議があったりする。私は生徒のそういう話を聞くのが好きだったりする。

錦ヶ丘中学校にも、もちろん七不思議があった。

二宮金次郎像が動く、女子トイレの三番目の個室に花子さんがいる、といった定番モノもあれば、朝礼台の下に事故死した生徒が埋葬されている、などという大きく出たものから、秋の体育大会は必ず雨が降る、のような日常ジंकスものまで、枚挙に暇がない。

予想に反して、4月に着任してからこの方、狼の話は少しも聞かない。

私は狼の話を探して生徒たちの間を回っているが、どこにもその尻尾はつかめない。面白い話が出てこない。もう少しなにかあるかと思ったのだけれど。

「羽咋(はくい)くん、どうしたの」

羽咋渚。二組の男子生徒。旧校舎の三階の廊下から、窓の外をぼんやり眺めている。大人しく、休み時間もあまり遊んでいるのを見かけない。確か部活はテニス部で、そのテニス部なら今まさに、コートで練習しているはずだが。羽咋はばつの悪そうな顔をする。

「……別に」

「サボリ？」

「……」

「サボりはいけないなあ」

羽咋は答えない。かと言ってここから逃げ出そうともしないで、押し黙っている。夕日が古い廊下を染め上げて、変声期の野球部の掛け声が遠くに聞こえる。

「まあ、そういう時もあるよね」

「え」

「先生もほら、サボってるし」

羽咋は怪訝な顔をする。

「大人もサボりたくなるものだよ。職員会議、抜けてきちゃった」

「いいの、それ」

「駄目かなあ」

駄目だろうな。

「羽咋くんは、どうしてここでサボってるの」

「……人、来ないし」

旧校舎は資料館かわりに使われて、無料で開放されている。玄関のところの事務室にボランティアの職員がいるものの、そこの目さえ盗んで入ってしまえば、この時間には無人だ。

「先生も？」

「それもあるけど、ここで幽霊が出るって聞いたから」

錦ヶ丘中学校七不思議の一つ、旧校舎の三階に夕方現れる幽霊。それはかつてそこで死んだ少年の霊だという。

雑な話だった。

「ああ、それ」

「羽咋くんは怖くないんだ、幽霊」

「信じてないもの」

その声に強がりの響きはなかった。もっとも、七不思議を語る生徒たちも本気で幽霊の存在を信じているというばかりでもないだろうが、わかっているけど怖いというのが人間だろう。

「あんまり幽霊とか、興味ない？」

「……先生こそ、幽霊なんか信じてるの」

「信じてはいないけど、興味はあるよ」

「へんなの。学校の先生なのに」

「学校の先生だからだよ。幽霊って、多分だけど、いないでしょう？」

羽咋はまた、怪訝な顔をする。

「大人だから、先生だから、多分ないだろうなってわかっちゃう。きっと羽咋くんもそうだよ。大人っぽいもの」

「……」

羽咋は確かに、大人びているがゆえに悩んでしまう、そういう生徒のように見えた。表情は変えずに、けれど微かに彼は、恥ずかしそうに身じろぎした。

「それなのに、幽霊の話ってすごく流行るでしょう。クラスの子たちもよく喋っているでしょう？ だから面白いなって。存在しないものが、みんなの話題にこんなはずっとなるなんて」

それは実際、子供向けの方便でもなんでもなく、私の本心だった。

どんな学校にも、七不思議の一つや二つ、あるものである。

なぜか。

大人になった私には、二宮金次郎が動いたりしないことなど、わかりきったことである。

それではなぜ、七不思議の中では二宮金次郎は必ず動くのか。

「噂、流したからだよ」

ぽつりと羽咋が言った。

「え？」

「幽霊の噂を流したの、俺の兄ちゃんだから」

「え」

「兄ちゃんもサボリたかったんだって」

羽咋の兄はこの卒業生だという。去年卒業したそうだから私は面識がない。

「お前が幽霊を引き継いでくれって、言われた。だからここでサボってる」

「幽霊の、引き継ぎ」

羽咋が、ほらと言いたげに窓の外に目を戻す。

……なるほど。

この廊下に立っていれば、ちょうど夕日があたって、校庭から見れば人影だけが見えることだろう。こんな時間に旧校舎の三階に生徒がいるはずがない。それを遠目に見て、幽霊だと言わせる。

そうして他の生徒をこの廊下から遠ざけて、自分は部活をサボって黄昏れているというわけか。

「でも人が死んだのはホントらしいよ」

幽霊少年はふと言った。

「火事で死んだんだって」

私は校庭から改めて旧校舎を眺めた。なるほど三階の廊下の窓に、羽咋少年と思しき人影が見えている。夕焼けに赤く染められた校舎を見て、私は感心してしまった。燃えるような赤に染められた校舎に浮かぶ人影が、火事で亡くなった少年の幽霊という話にぴったりなのである。

羽咋少年の説明は説明になっていない。兄が噂を流したというのはきっかけであり、その幽霊話が語られ続ける理由ではない。

火事。

狼の尻尾にはたどり着かなかったが、狼を探していたらそれにたどり着いてしまった。

「……はて」

この話はなんだか良く出来すぎているなあ、と私は思う。

思います。

思いました。

携帯電話を取り出し、手がかりの画像をもう一度見つめます。

「……そういうことなのかもしれませんね」

そして、昨日図書館でコピーしてきた新聞記事を取り出して、こちらもまた、眺めます。

*

20xx年10月6日付 金沢日日新聞

中学校の屋上で不審火

6日未明、金沢市立錦ヶ丘中学校の屋上で炎が上がっているとの通報があった。警察と消防が現場に到着した時にはすでに自然鎮火していた。けが人はなかった。屋上のコンクリートが焦げていたものの、現場に火が出るようなものはなく、県警は放火の可能性も含め捜査を続けている。錦ヶ丘中学校は6日、臨時休校となった。

*

中学の名前で検索して見つけた最初の記事です。これを読む限り、幽霊少年が言っていた「生徒が死んだ」というのは嘘なのですが。しかし、かつてこの中学で火事があったことは事実なのです。

*

20xx年10月8日付 金沢日日新聞

ホテル客室で火事 周囲は一時騒然

7日深夜、JR金沢駅前のビジネスホテル『プレミアムホテル金沢』の五階客室から出火し、一部屋約14平方メートルが全焼した。県警によると、この部屋の宿泊客の30代の男性が煙を吸って病院に運ばれたが、軽症という。金沢東署によると、男性は調べに対し、「眠っていたところ息苦しさが目が覚めた。気付くと部屋中が煙に包まれていた」と話しているといい、同署が出火原因を詳しく調べている。現場はJR金沢駅前の繁華街で、周囲は一時騒然となった。

*

20xx年10月10日付 金沢日日新聞
犀川大橋で車3台炎上 立て続けに爆発か

9日午後4時ごろ、金沢市千日町の犀川大橋で車が燃えていると通報があった。燃えた3台の車に乗っていた男女合わせて4人のうち、男性1人が軽いけがをして一時病院に運ばれた。火は約一時間後に消し止められた。県警と金沢市消防局によると、現場は片側二車線の直線道路。焼けたのはタクシーが1台と通勤途中の自家用車2台で、それぞれボンネット、車体後部、助手席付近から出火したとみられる。このうち助手席付近から出火したとみられる車に乗っていた男性は、「突然衝撃と大きな音がして、助手席のドアが燃えていた。何が起こったか分からなかったが、ともかく車を降りたところ、他にも燃えている車があった」と話しているという。県警と消防局は出火の原因を詳しく調べるとともに、何らかの事件の可能性もあると見て捜査している。

現場近くを通りかかった女性は、「大きな音がして、車から次々に火柱が上がった。燃え移ったというよりも、それぞれ爆発したように見えた。炎は激しく、歩道まで熱さが伝わってきた」と話した。

*

火事は他にも、日宮神社という河北の神社で一件、また市内のオフィスビルでも一件起きています。神社の方は派手に本堂が全焼していて、これはある意味普通の火事のようにですが、オフィスビルの方は三階のフロアだけが燃えて火元が結局わからなかったとあります。

はてさて、これは面白い記事ですよええ、と私は思います。

少し考えを整理するために、気分をかえる必要があると思いましたので、今日は張り切ってやって来ました。香林坊でバスを降りた私は、目的地を目指して脇道に入っていきます。大通りから一本入った狭くも広くもない道ですが、建物と建物の合間の緑が落ち着いた感じでした。遊歩道に流れている小さな川が、結構水量があります。小さな広場に俳句用の看板があり、句が書いてありました。

目つむれば若き我あり春の宵 虚子

ホワイトボードっぽい看板に手書きの文字なので、定期的書き換わるのでしょうか。さすが文化の街ですね、と思います。虚子って金沢に関係あったのでしょうか？ 子規と虚子と碧梧桐は松山でしたよね。

さて、目的のお店にたどり着きました。たべてみまっし、と書かれたのれんは、いい感じに日に焼けています。食べてあげようではないですか。

カウンター席だけのこぢんまりとしたお店です。カウンターの中には、ご夫婦でしょうお二人がにこやかに我々を迎え入れてくれます。私は端の席に着きました。卓の上には醤油と書かれた醤油差しがどんと置かれています。そのあまりにもストレートな醤油アピの強さに、これで中身ソースだったら面白いなと思いました。面白くない。

表には店名すら出ていませんでしたが、ここは有名店なのです。食べログとかで。いつもなら行列ができるそうですが今日はタイミングが良かったのか、スムーズに入ることが出来ました。同時に入店した三人組は地元の方のようです。

「海鮮丼」

「じゃあ私も」

「はい海鮮丼二つね、お姉さんは」

「私はすみれ御膳で」

「あ、ちょっと待って、そっかすみれ御膳あったなー」

「それ一番オトクなやつや！」

店主のおじさんがなんか滑らかにお客さんとの会話に入っていますね……。

私も店名を冠した御膳狙いです。このセットには海鮮まんじゅうという練り物が追加できますが、追加するのが定跡だそうです。

「すみれ御膳をお願いします」

私も注文します。

「練り物はつける？」

「はい」

「あの中から一つ選んで」

指差した壁に短冊がたくさん並んでいます。

白子まんじゅう、枝豆（うに入り）、かぼちゃ（うなぎ入り）、たけのこわかめ（甘えび

入り)、ほたるいかまんじゅう、のどぐろまんじゅう、里芋(うに、えび入り)、じゃがいも(ホタテ入り)、れんこん(牛タンいり)。

たくさんあるし味が想像できないので選ぶのがかなり難しいです。

「今日のおすすめはほたるいか」

「じゃあ、ほたるいかで」

店の中を見渡すと、他にも色々と壁に貼ってあるものがあります。何か料理の賞らしき賞状や、口コミサイトのランキング一位ステッカーは店の隅っこでよく見えないのに、息子さんと思われるスポーツ選手の記事がでかでかと掲げてあるのが微笑ましいですね。

「今日は大トロの炙り」

店主のおじさんの調理している姿がカウンターなので近いのも良い雰囲気づくりに一役買っているように思います。

「美味しそう！」

「美味しそうじゃないよ美味しいんだよ」

そんな軽口が繰り返されます。

さて、そろそろ料理が運ばれてきそうかな、というタイミングで、私の隣の空席に、その時の店内の最後の空席に、もう一人お客さんが座りました。

「あれあれ、七尾先生？」

「えふ」

私はむせました。

じゃない。

私はむせた。

「つ、津幡先生」

思わぬところで同僚を目にした私は、驚いて咳き込んでしまったのだった。

「あれー。びっくりですねー七尾先生。いつのまに」

津幡愛。同僚と言えば同僚だが、教え子と言えば教え子だ。近くの大学の教育学部から来ている教育実習生である。

担当教科は英語なので私が直接授業を見てはいないのだが、そこここで様子を見かける限りでの印象は、『肝が据わっている』だ。生徒相手に物怖じしないのはもちろんのこと、ベテラン教員たちからの厳しいご指導も何のそのといった風情で、飄々としているその様は職員室でも話題であった。明るい性格で、生徒たちには親しみやすい先生として評判のようである。愛ちゃんとか呼ばれている。そういう親しみやすいキャラは良し悪しで、得てしてベテラン教員からは小言を言われまくるものなのだが……。友達感覚じゃ困るんですよ、とか。しかし、彼女はものともしていない。

「七尾先生さっきまだ職員室いたじゃないですか。瞬間移動ですか？ トランスポーターションですか？」

「英語教師なのにカタカナ発音なんだ……」

「ノンノン、勤務時間外アルヨ」

何人設定だ。全く食えないやつだなと私は思った。

「超スピードの移動なんですか？ Bダッシュですか？ いや、それとも二人いるとかですかね。七尾だけに」

「……どういう意味です」

「いや、どっちかが偽物ってことですよ。狐に化かされてる、みたいな」

「ああ、九尾の狐で、七尾ね」

わかりにくいボケですが、鋭いですね……。

「ま、それは良いんですけど。あ、海鮮カレーお願いしまーす」

「……津幡さん、ここ、ひょっとして常連？」

「まあ。地元ですし」

「このあたりの出身なんですか」

「そうですよ。錦ヶ丘だって、私、卒業生ですし」

面倒なことになったなあとは私に思いました。

そもそも、錦ヶ丘中学校の社会科教師、『七尾かがり』の姿のままで食事に来ているのが大悪手です。本来ならばこういうときは、こういうアクシデントが起きてしまったときには、津幡さんと当たり障りのない会話をしつつ、できるだけ早く食事を終わらせて立ち去るのが常道でしょう。

しかし。

しかしです。

彼女が錦ヶ丘中学の卒業生であるとわかった以上は、私にはしなくてはならない質問がありました。そういう具体的で、実を伴うような、記憶に残ってしまうような話をここでするのは、余り褒められた行いではありません。だって、本物の七尾先生にかかる迷惑が一気に増えてしまうのです。

姿を変えた状態で、むやみに人と関わるな、人の記憶に残るようなことをするな、と父には言われました。父は変身するなとは言いませんでしたが、それで人に迷惑をかけるなといつも言っていました。

母はそんなこと気にするな、とりあえず場を荒せ、混乱させとけ、無茶苦茶にしろ、ぶち壊すのじゃ、と言っていました。

どっちに従うのが人間として良識的な行動なのかは言うまでもありません……。

……けれど。

それでも。

私は自分の好奇心を止められませんでした。

「ところで津幡さん、錦ヶ丘の卒業生ってことは、知っている？ 昔、屋上で不審火があったの」

やってしまった。

「あー。あったあった。私が二年生だったころですねー。屋上で何かが燃えたってやつで。結局原因も何もわからずで迷宮入りしました」

「本当に何も分からなかったの？」

「原因不明です。まあ在校生や卒業生の悪戯じゃないかって、そりゃみんな思いましたけど。でも証拠もなくって」

「誰か疑われた人とかは？」

「んー？ 具体的に誰が、ってことはなかったと思いますよ。少なくとも私は知りません」

「そりゃあ鼠の仕業かもな」

店主のおじさんが口を挟む。

「あはは。かもですねえ。まさにそんな感じで、学校側もあんまり追求しませんでしたよ」

あ、鼠の話って、本当にみんな知っているんだ、と私は思いました。

鼠の話というのは、この地域の現代民話とでも、あるいは都市伝説とでも言うべきお話なので

すが、昨日、図書館で偶然私はその資料を読んでいたのです。

あれ。

でも、津幡さんが火事を見たのが二年生のときということは。

「津幡さん、もしかして、神谷内香織って子、知っている？」

「あー。知ってますよ？」

私はちょっと素に戻りそうになりました。

先生もお知り合いなんですか、と聞かれ、私は適当にごまかしました。あまりにも適当すぎてどうやってごまかしたのかもよく覚えていないくらいですが、津幡さんはあまり気にしなかったようです。ああ、七尾先生に申し訳ない、という気持ちは、残念ながらどこか遠くへ行っていました。最低だなあと私は思いました。

聞けば、やはり同学年だったそうです。ということは私とも同い年なのですね、この方は。

「いやほら、あの子名前が珍しかったし」

「地名だって聞いたけど」

「ん？ あー、名字じゃなくって。名前です」

「……『香織』が？ 珍しい？」

「漢字が、ですね。普通カオリだったら、香りに織るって書くじゃないですか。でも織るの漢字が、糸へんじゃなくて、火へんなんですよ」

そう言って彼女はスマホに文字を入力し、私に見せてくれました。

香熾。

「あんまり良い漢字なのかどうかは、正直わかんなかったですけど。大人になって見ると、私はこの字は熾天使を連想しちゃいますねえ。単体だと、火が盛んに燃える感じでしょう？ 女の子の名前っぽくはないかなって」

私は自分の携帯を取り出して、電話帳を確認しました。

神谷内香織。

「まーでも、今の子供たちと比べたら普通の領域か」

私は首をひねります。

火が盛んに、燃える感じ？

「現代っ子はすごいですもんねー。私びっくりしちゃいましたよー。三組の御神火ちゃんとか二組の永久瑠くんとか」

私はずっと考え事をしながら、すみれ御膳をいただきました。とても美味しかったということはかろうじて覚えているのですが、考えに沈んでしまった私には何がどう美味しかったのか、しっかりと記憶しておくことが出来ませんでした。海鮮まんじゅうの今まで食べたことのない柔らかさ、じゅわりと染み出す出汁の旨味、この値段で出てくるとは思えない美味しいお刺身、揚げたて熱々ふわっふわのさつま揚げ、メは海鮮キムチとわさびで無限にいけるお茶漬け（この食べ方は津幡さんが教えてくれました。地元の人言うことは素直に聞くものです）、そういったものがともかく無限に有限に異次元に美味しかったような記憶だけが残っていますが、それ以上のことはよくわかりません。

「あと一組の理想女ちゃんとかすごいですよねー。名前でハードル上がっちゃうってよくありますけど、もう上がりすぎな。銀行っぽいし」

『二十八歳、地方都市の公立中学の女性教師（社会科）が平日に着ていそうな服セット』を脱いで、ベッドに横になります。これベッドはどうやって部屋に入れたんだろうなあ、という感じのビジネスホテルです。部屋とベッドとわたし。意外と落ち着くんですよねえ。

鼠の話について振り返っておこうと思います。

私は図書館で取ったノートを開きます。

それはおおよそこういう話でした。

明治の時代から終戦までの間、金沢城址には陸軍の第七連隊が置かれました。ある夜、城跡の兵舎からもうもうと白い煙が上がり、「七連隊が火事や！」と街は騒ぎになりました。結局、火事そのものはすぐに消し止められたのですが、なぜ火事が起きたのか、街ではもっぱらの噂でした。

スパイの仕業だ、とか。

兵隊の教練がつらくて、気がおかしくなった兵隊が火を付けたんだ、とか。

新聞には陸軍の発表が載っていましたが、「原因は目下調査中」とだけ。

記者は毎日軍を訪れましたが、来る日も来る日も、「調査中」。

そんな中、数日がたったとき、街に新しい噂が流れ始めました。

「原因は鼠のしょんべん」、というのです。

なんでも、兵舎の隅に石灰を入れた袋が積んであったのだそうです。そこを鼠が四六時中駆け回っていたものですから、そのうちに袋が破けて穴が空いていた。さらにそこへ、鼠が小便をし、その水分が石灰と反応し、発熱して、袋や周りの建物に火がついたというのです。

噂にはもっともらしい設定もついていました。

「司令部のお偉いさんが、警察署長にそう説明していた」というのです。

この噂を聞きつけた新聞記者は、軍に直接聞いてみました。

「火事の原因はわかりましたか」

「目下、調査中である」

「鼠のせいだと言われていますが」

「石灰が水分と反応するということは、まあ確かに、無いとは言えんだろう」

「では鼠のせいというのが公式発表でよろしいですか」

「いやいや、目下、調査中である」

「いつ調査結果が出るのですか」

「それはわからない。相手は鼠。尋問するのにも時間がかかる」

最後のはあまりにも取って付けたみたいな落ちですが、これは実は、笑い話として伝わっている伝承なのです。

というのも、街の人達にも本当の原因はなんとなく分かっていたのです。

実際は至極単純、兵隊が酒を飲んで、煙草の火の不始末で火事をだしてしまっただけなのです。しかしそれを公表するのは体面が悪い。だから軍は正式には何も発表せず、一方で「鼠の仕業」などという噂を流していたわけです。

鼠に悪者になってもらう。

火事そのものが、延焼もせず、大した被害も出なかったからこそできる笑い話ではありますが、つまりは原因となった兵隊さんを責めず、真実を曖昧なままに終わらせてしまう、ということなのでしょう。

このお話を下敷きにして、この街では不審火の原因はしばしば鼠にされるのだそうです。

もちろん石灰は水と反応すれば発熱しますし、それが原因で火事が起こるというのも、まあ「ギリギリなくはない線」なのではないでしょうか。化学的にどうなのか今度調べようと思いますが。しかし素人的には「そういうこともあるのかなあ」と半信半疑ながら思ってしまうレベルなわけです。

そこがこの都市伝説の『都合の良さ』『都市伝説的なところ』なのだと私は思います。

さっき店主のおじさんが言った「鼠のせいかも」というのもそういうことでしょう。生徒の放火だなんて話を大きくしてしまうよりは、もしそうだったとしても本人は反省しているだろうと期待して、犯人探しはせずに「鼠のせい」で埋めてしまえ、ということですね。

この話が私の記憶にひっかかっていたのは、似ていたからです。

江ノ島の話、そして都市伝説化した『アシキ』の話。

「便利だから語られた」と香織が断じた二つの話に、似ているように思ったからです。「鼠のせい」が不審火に対する緊張を緩和するキーワードとして便利に用いられていることは、今日まさに目にしたわけですから、この感覚は間違っていないのでしょうか。

私は例の新聞記事をまた取り出しました。

この一連の不審火も、すべて「鼠のせい」だったのでしょか。

鼠。

狼。

火。

香織と香熾。

単語を並べて、ぐるぐると回します。

携帯電話を取り出して、例の写真を眺めます。

穴のあくほど。

煙が出そうなほど。

炎が上がりそうなほど。

この街に来る前から持っていた手がかりの写真と、この街に来てからわかったこと。その一つ一つを積み上げます。

この数日、ずっと考えているなあとは思います。これまでに、一人の人間のことを、ここまで考え続けたことってあったでしょうか。なんとしても正解しなければ、と私はまた深呼吸をします。神谷内香織のことを考えます。

穴のあくほど。

煙が出そうなほど。

炎が上がりそうなほど。

写真を眺め続けた先に、私は一つの仮説にたどり着きます。

梅雨の気配がしてきた曇天に、いびつな階段を登ります。三階まで登るだけで、もうバテそうです。空気が湿って、じっとりとして、これから夏が思いやられます。

「おや、燈花ちゃん、今日は登校？」

研究室に上がると、今度はみとはち先輩が一人でした。

「私、不登校というわけでは……」

「いやでも、昨日いなかったでしょ？ バウジンガー」

「あ、はい……自主休講です」

バウジンガーの『科学技術世界のなかの民俗文化』を読む授業で、これがなかなか面白いのですが、背に腹は代えられませんでした。

「自主休講って、大教室で百人くらいいる授業でやるもんだと思うけどねえ。まいいけど」

確か履修登録者が5人くらいだったはずです。先生には今度謝っておきましょう。

「みとはちさん」

「ん」

「この間は、ありがとうございました」

私は頭を下げました。

「え、なんだっけ」

「占いの話です」

「ああ、香織っちの下着の色の話」

「下着の色の話ではない」

「今は……白だね」

「詳細をお願いします」

「下着の色の話ではないよ」

確占状態なのですからちゃんと占ってほしいものです。

「ともかくみとはちさんのお陰で先生と話ができました」

「おー、それはよかった。センセーに聞きたいこと聞けた？」

「聞けませんでした」

「あれ」

「だから自主休講(サバティカル)していたわけですが」

「サバティカルではなかった」

「それ、地の文でやるんですよ」

こんな感じで。

「そんな感じと言われても、今回は地の文を使えるのは君たち二人だけだからさあ」

メタいことを言わないでください。

「どうも私ら二人だと話が滑るねえ」

「みとはちさんがメタい話をしすぎるからです」

「それでえ」

みとはちさんが眼鏡を上げました。

「香織っちのことは大丈夫だった？」

「いえ……私なりに調べてみましたが、仮説止まりです」

「仮説かぁ。下着の柄の話？」

「下着の柄の話ではない」

「じゃあ香織っちが実は狼とか」

え。

「え？」

え？

眼鏡の奥でみとはちさんが笑いました。

「占い師だからね、白(にんげん)か黒(おおかみ)かくらい見えてるって」

……。この人何者なんでしょう……。

けれど、私はなんだか、それによって一気に緊張が解けたような気がしました。メタな話ができる人、香織が狼であるというところまで知っている人。そういう存在であれば、自分の仮説を話すことに抵抗がない、そう思えたのです。

「みとはちさん、私の仮説、聞いてもらえますか」

「私の仮説はこうです。神谷内香織は、狼だが、もともとそうだったわけではない」

「ほう。ほーう。なるほどね。出自か。考えたことなかったなあ」

みとはちさんが考え始めます。

「確かに。今現在狼であるかどうかはわかっても、それが先天的に狼なのか、後天的に狼なのか、それはわからないわけだ。だからそこに仮説設定の余地があるねえ」

みとはちさんはこれを仮説のゲームとして楽しむつもりようです。

「まず彼女の名前です。今は香織という字を名乗っています。学籍の書類もそうになっています。けれど、見てください。中学までは香熾という名前を使っていたんです。高校に入ったタイミングから、香織に変えています」

私は卒業アルバムのコピーを出しました。名前のお話を津幡さんに聞いて、職員室で調べてみたのです。中学生の頃の香織はまだ髪が結構長くて……でもなんか目つき結構鋭くて……その……良さがある。しかし写真の下の名前は神谷内香熾になっているのです。

「へえ、卒アルじゃん。どやってこんなの持ってくるのさ」

「がんばりました」

「がんばるのやめろ」

「熾というのは、火を起こす、と同源。熾す、で火の勢いを強くすること。熾火、といえは赤くなった炭火。そういう、火、炎に関係する文字なんです。珍しい名前のお文字だったんです。けれどある時から、それを避け始めた」

「まあ、あんまり良い意味の文字には思えないから、嫌だったのかもしれないね」

「漢字が好きでなかった可能性はあります。けど、ちょっと好みに合わないと言うだけで、こうバツサリ漢字を変えてしまうのは勇気がいりますよ。確認はしていませんが、普通に考えれば戸籍上の名前は香熾の方なわけで、高校入学時と大学入学時、それをどうにかして偽って、香織、で学生登録しているわけです」

そう言って私は、香織のバイトの履歴書と、それに添付されていた学生証のコピーを取り出しました。履歴書と学生証の名前は香織になっています。

「相当思いきらないとこんなことできませんよ」

「いや、思い切ったらできるのかね……」

「まあ色々やり方はあるでしょう。文科省に知り合いがいるとか」

「いや、文科省に知り合いがいても無理では」

「じゃあ大学に知り合いがいるとか」

「もっと無理では？」

「それで火についてです。彼女が中学生の時、学校で不審火がありました」

私は例の一連の新聞記事を出しました。

錦ヶ丘中学校の不審火。

ビジネスホテル『プレミアムホテル金沢』の火事。

犀川大橋での自動車火災。

日宮神社の火事。

市街のオフィスビルでの火事。

「ははあ、これなに、連続放火？」

「距離と状況がバラバラすぎるんですよ。単一犯の連続放火にしては。規則性もないし、だいたいホテルの部屋の中とか、オフィスビルの特定の階の天井とか、火の付け方がよくわかりませんし、自動車火災はもうこれ、謎の爆破みたいなものです」

「不思議な事件だねえ」

「これが火、炎じゃないかと私は思うんです。この炎から、彼女は逃れて、名前も変えて、東京に出てきたのではないかと」

「ふうん？」

みとはさんは眼鏡を上げました。

今のは無茶苦茶、というか、私は何も説明できていません。香織が火を嫌がったという可能性と、その時期に金沢で不審な火事が起きていたという二つの事象が、つながる理由を説明できていません。

だからこそみとはさんは、私に先を促していました。

「狼というシンボルについて調べてみました」

「お、民俗学っぽい。そういう大学目指してみたら？」

「就職に困りそうなのでイヤです」

「確かに」

「日本において、狼というのは山の聖獣で、神格化された存在です。お犬様。山犬。大口真神。他の動物は、だいたい神の使いですが、狼は同時に神そのものであることもあります。狼は、大神ですからね。古くは古事記から、ヤマトタケルの話に度々登場しています。また、山岳信仰と相性が良かったために、庶民から広く信仰を集めました。爆発的に流行ったのが江戸時代で、狼は災いから守ってくれる存在として信仰されました。本当かわかりませんが、江戸時代には狼の御眷属の御札が年間一万枚売れたという記録があるそうです。狂犬病が流行ったりして勢いがなくなって、結局最後は稲荷信仰の方が強かったようですが……」

「まあお稲荷様は強いからねえ」

「そしてこれを見てください」

私は携帯を取り出しました。

例の画像。

画面に写っているのは、香織の首筋のあたりです。

「いやいや、なにこれ、裸じゃん」

「裸でないと見えないじゃないですか」

「背景シーツじゃん」

「地面で撮るわけにいかないでしょう」

「いやいや、なにこれ、え、盗撮？」

「全身写ってるバージョンもあるので、抱き枕カバー化もできます」

「抱き枕カバー化するな」

「ともかくご覧頂いて分かる通り、そういうことなんです」

それは怪我をした彼女を家に連れ帰り、寝間着を着せている途中に目に入ってしまったものでした。

神谷内香織の首筋には。

浮き上がる背骨の下辺りには。

お犬様が描かれた小さな御札が貼り付けられていました。

それは日本の狼の姿のようでもあり、西洋の人狼の姿のようでもありました。むしろ、それらをミックスしたような、奇妙な姿でした。

「神様のパターンとは別に、狼は人に化ける生き物でもあります。狐ほどじゃありませんが、狼が人に化けていた伝承というのは、例えば『鍛冶屋の婆』とかが有名ですよ」

『鍛冶屋の婆』は、『千足狼』とも呼ばれる伝承の類型です。

山道を歩いていると、夜になってしまった。狼の群れに追われた主人公は、たまらず木に登る。すると狼は木に登れないので、次々と肩車をして木の上の主人公を狙ってくるが、ギリギリ届かない。すると狼達は、「何処其処の鍛冶屋の婆を呼べ」と話し合う。やがてひととき大きな狼がやってきて、肩車されて木の上の主人公に襲い掛かってくる。必死に主人公が脇差で斬りつけると、手応えがあり、狼達はみんな逃げていった。

翌朝、村についた主人公は、「鍛冶屋の婆」を訪ねていく。婆は怪我をして寝ている、という家人を押し切り、部屋に飛び込んで寝ていた婆を斬り伏せる。するとみるみるうちに婆の身体は狼のそれに変化する。床下を明けてみると、婆の骨が見つかった……。

「これは一番有名なパターンです。色々と派生パターンがありますが、面白いのは、婆が元から狼だったパターンもあるんです。つまり、床下から本当の婆の骨が出て来る下りが無いパターン。婆は元から狼で、人間に嫁いだという、異類婚姻譚の要素が入ったものですね。その場合、必ずと言っていいほど付け加えられる設定が、『その家系は、背筋に狼の毛が生えている』なんです。狼の血を引いていることの証左が、背中の毛として現れている。だからこれは、純粋に学術的興味として、つまり神谷内香織という狼が、先天性なのか後天性なのか、それを見分けるための手段として、私は背筋を見た、そして資料としてそれを撮影した、そういうことなのです」

「そういうことではない」

「ともかく、この御札です。狼の毛ではありません。毛は生えていなかったのです。毛は生えていなかった。はい。つまり……つまり、香織が狼になったのは後天的と推定できます。というかこの御札の効果でしょう、十中八九。さて、普通このお犬様の御札は、御眷属の御札は、どういふご利益を謳って使われているか、みとはちさんはご存知ですか」

「んー、なんか悪いものから守ってくれるとか、そういうざっくりした感じじゃなかったかね」

「大筋合っています。実際そのように拡大解釈されています。しかし遡れば、その源流というのは、火盗除け、なんです」

火付け盗賊。それを除ける。

「ああ……そこで、火につながるんだ」

みとはちさんがゆっくりと息を吐きました。

「そうです。彼女は中学生までは香熾という名前を使っていましたが、高校に入って東京に出てきたタイミングで、香織に漢字を変えています。中学時代、明らかに不自然な火事が、彼女の通っていた中学を皮切りに街中で起きました。その火を封じるための狼なんじゃないか、と置くのは、無理矢理過ぎる仮説でしょうか？」

「……」

「ついでに言えば、御眷属様のご利益はもう一つ有名なのがあります。憑物落としです。火に憑かれた彼女が、それを落とすための手段として頼っているのが狼なのではないでしょうか」

「……」

みとはちさんは黙って、眼鏡を上げたり下げたりしています。

「眼鏡を上げたり下げたりするのやめてください」

みとはちさんは眼鏡を上げました。

そしてゆっくりと口を開きました。

「燈花ちゃんさあ、香織っちと最後に話したの、いつ？」

「……はい？」

みとはちさんが窓際に移動して、眼鏡の角度を調整しました。

眼鏡のレンズを反射させて瞳が見えない状態になっているようにしてかっこいいことを言おうとしているようです。

「もしかして眼鏡のレンズを反射させて瞳が見えない状態になっているようにしてかっこいいことを言おうとしてますか」

みとはちさんが眼鏡をいじるのをやめました。

「かっこいいことは言わないから、教えてよ。香織っちが最近大学に来てないのはなぜ？」

「……それは」

「燈花ちゃんはきっと、調べ物をしていて昨日は自主休講だったんでしょう。いま教えてくれた話を考えれば、まさにそれはきっと、香織っちのことなんでしょう。それこそ、その新聞をコピーしに現地に行ってきたとか」

それは、みとはちさんの言うとおりで。

「燈花ちゃんが頑張っってそれを調べているのって、まあ普通に考えれば、香織っちが学校に来なくなっったのと同関係があるんじゃないかと思うよ」

それも、みとはちさんの言うとおりで。

「ねえ、どうして香織っちは引きこもっているのかな」

みとはちさんが眼鏡のレンズを反射させて瞳が見えない状態になって言いました。

「占い師の私に、教えてくれるかにゃ」

噛みましたねとは、今度は言えませんでした。

*

私はざっくりと事情を説明しました。

もうこの人には全部バレているかもしれませんが、さすがに自分から、ドッペルゲンガーの話や妖狐の話はしませんでした。そこは伏せて、自分が香織を怒らせてしまったこと、その原因は、おそらく、私が彼女の気持ちを何も考えず、何も知ろうとせず、何も知らずに行動したことだったと、極めて抽象的なのですが、そう説明しました。

「特に、私が分かっていなかったのが、わかろうとしていなかったのが、彼女の狼に関する部分だったので、私はそれを知る必要があったのです」

「ははあ」

みとはちさんは溜息をつきました。

「それで最初の質問に戻るけれど」

みとはちさんは眼鏡を外しました。

伊達だったのでしょか。

みとはちはまた眼鏡をかけました。やっぱりよく見えなかったようです。

「最後に香織っちと話したのはいつ」

「……三週間前、です」

「それは香織っちが学校に来なくなったタイミングだよな」

「そうですね」

「さっきの話だと、香織っちは、燈花ちゃんと喧嘩をして、それで学校に来なくなったんだよね」

「多分、そうだと思います」

「多分？」

「はい」

「多分、なんだね」

「はい」

「それも聞いていないんだ」

みとはちさんが言わんとすることが、少しずつ私にも見えてきました。急に部屋の空気が重くなったように感じます。

「じゃあ香織っちの正体について調べていたのも当然本人は知らないんだ？」

「……知りません」

「香織っちの狼要素についての理解が不足していたことが喧嘩の原因であったというのは、両方で合意した共通認識じゃないんだ」

「……違います」

みとはちさんがもう一度溜息をつきました。

「馬鹿か？」

みとはちさんがそんなことを言うのは、今までに聞いたことがありませんでした。

「まあ喧嘩の内容とかについては、言いたくないなら言わなくても良いんだけど、だからそこは想像で補ってしまうけれど、燈花ちゃん、君はいみじくも自分で言っているよね。気持ちを考えずに行動したことが問題だったんじゃないの。それなのに、またそうやって、自分なりの勝手な判断で、勝手に行動していないかな」

「大体そもそも土台もともと、狼かどうか云々が分かってなかったから喧嘩になったという燈花ちゃんの解釈が当たっていたとして、それでどうして、調査に出かけることになるのさ。香織っちの正体を正しく言い当てたら仲直りできるなんて思っているならそれはどうかしているよ。いや本当に、これは本当に単純に素直に真っ当に考えてほしいんだけど、いきなり友達が、お前の中学時代の経験を調査してきたとか言ってきたら普通にどう思う？ 嫌じゃない？」

「好きな人のことを知りたくなるの、普通のことだと思うよ。好きな人の故郷に行ってみたくなくなるのも、普通のことだと思うよ。けれどそれは、一人で勝手にすることじゃないよ。二人で行けばよかったじゃない、旅行で。案内してもらえば良かったじゃない。その街をさ。どうして、一人で行っちゃうかな」

「いや、まあ、調査したとしよう。いいよ。調査した。燈花ちゃんはそういう子だから、調査

した。それででもさ、その仮説にしたってさ、私に聞かせるって何さ。いや、楽しかったから良いよ、私は。でもそれを最初に話すべき相手って、私じゃなかったんじゃないかな」

「……だからさ、話すべきだよ。もう3週間も経ってしまった後だとしてもさ。仲直りするのにはそれしかない。結局、核心のところを燈花ちゃんは調べてないじゃない。一番の情報源に当たってないじゃない。だからわかっているんでしょう？ 本当の答えは本人から聞くしかないんだ。私達はさ、『一目見れば』の妖狐じゃない。話し合わないと分かんないよ」

ああ。

私は藤木先生の電話での言葉を思い出しました。

神谷内くんのことを知ってあげてほしい。

彼女にはきっと、理解者が必要だ。

それは、別に勝手に彼女のことを調べろと言っているわけではないと、ふと気づきました。いやむしろ、普通にその言葉を、みとはちさんのようなまともな考え方を持って解釈するのなら、それは神谷内香織と話をしてやってほしいという意味にとらえられることに、とらえるべきであることに、私は気づいてしまいました。

「……ありがとうございます、みとはちさん」

私は間違いを繰り返してしまったのだと思いました。金沢まで行ってはしゃいでいた自分が馬鹿みたいに思えてきました。

「ん、行ってきなよ」

みとはちさんは眼鏡を上げました。

「黒で行きなよ」

「は？」

「だってさ、勝負でしょ？」

うつくしき川は流れたり
そのほとりに我は住みぬ――

文庫本を閉じ、顔を上げる。

僕の目の前に「うつくしき川」がある。

文庫本の乾いたにおいが鼻を優しくくすぐる。父の四十二冊目の文庫本は、僕の定位置の川を歌っていた。

犀川は強い。雄大な川である。キラキラと輝きながら、それでいて水量が多く、流れも速い。毎日見ても飽きない。毎日変わらない、力強い自然がここにいる。それは僕の心の支えになってくれる。

夏休みが明けてから学校をサボりがちだった。今日もこうして本を読んでいる。学校が始まってしまうと読書の時間が圧倒的に取れなかった。そのことに、僕は言いようのない恐怖を感じていた。僕には進捗が必要だった。

だからここにいる。

「うつくしき川」の前にいる。

僕が回収できた父の本はざっと百冊。こうしてみれば、まだ折り返せてもいないのだ。ここでペースを落とすわけにはいかない。

すべての本を読むこと。

感想を記憶に残すこと。

読み終わった本を父に返すこと。

僕はひたすらにそれを続けた。

風が吹いて、もう夏服だと寒いなと思った。

四十二冊目の途中で、ゆらりと現れた男、陰鬱な冷笑を浮かべたその男からは、甘いような、煙たいような、不思議なおいがした。

「そうだね、確かに、ここで読むのにはうってつけなのかもしれないけれど」

思わず身を引く僕に構わず、ずいと文庫本の背に顔を近づけた男は、タイトルを読み上げる。

「室生犀星詩集。いくら金沢市民だって、そんなの読んでは中学生いるかい？」

「なんですか、おじさん」

僕は露骨に眉を顰めた、と思う。

「公務員」

「公務員？」

「しがない国家公務員だよ」

男は、かろうじて襟があるから許されるでしょう、とでも言いたげなギリギリな格好をしていた。ろくにアイロンもかかっていないワイシャツのボタンをはだけさせ、紺色のジャケットの

袖は若干足りていない。突き出た腕にはチープカシオ。許されてないぞ。髟面の目は妖しく、どこか哀愁さえ感じさせた。僕の学校では学年だよりに不審者情報欄というのがあって、どこでどういう不審者が出ましたみたいなことが注意喚起として載っているのだけれど、それが脳裏に浮かんだ。

犀川大橋付近の河川敷で中年の男が『国家公務員だよ』と女子生徒に声をかけた事案。

「国家公務員が何してるんですか、ここで」

「悪いやつを取り締まり」

「悪いやつって」

「妖怪とか」

「妖怪？」

犀川大橋付近の河川敷で中年の男が『妖怪退治だよ』と女子生徒に声をかけた事案。

「妖怪は何処にでも存在するからね。人の心あれば妖怪あり。君や俺の中にも妖怪と言うものはいるんだよ。じっと覗き込めば見えてくる」

犀川大橋付近の河川敷で中高年の男が『ほら見て。俺の妖怪』と女子生徒に声をかけた事案。

「事案だぞ」

僕は言った。言うほど事案ではなかった。

「君、錦ヶ丘中学の生徒だよ」

僕はますます眉を顰めた。四十二冊目を鞆にしまう。

「いや、そんな怖い顔しないでよ。妖怪みたいだよ……」

眉を顰めるというよりも顔を顰めるような状態になってきた。さすがに女子を妖怪呼ばわりするのはよくない。

「違うんだ、俺、女子の制服を見たらどこの学校かわかるってだけで」

「事案だぞ」

僕は言った。事案だった。

「いやだってほら、一応所轄省庁だからさ。あ、俺、文部科学省のこういうもので」

男はジャケットの内ポケットから名刺を生で取り出し、慌てて裏返してから僕に差し出した。

文化庁文化部宗務課 企画官 藤木圭吾

いや、文科省じゃないじゃん、と僕はつつこみかけて、文化庁って文科省の外局か、と思った。外局というのがどういう仕組みなのかよくわからないけれど、文化庁は文科省の子会社みたいなものなのだろう。

裏返してみると、こう書いてあった。

文化庁文化部宗務課（妖怪担当） 企画官 藤木圭吾

「妖怪担当ってさすがに何だよ」

「うわ、やめてよ、そっちは秘密の方だから」

「じゃあ両面にするなよ」

「白黒両面印刷必須なんだよ」

環境省からの圧力が、と男はモゴモゴ言った。

「いやいや、ごめんごめん、寄り道しすぎたね。寄り道入道かな。君に聞いたかったのはさ」

寄り道入道ってさすがに何だよ。そういう妖怪がいるのか？

「君の中学校だと思っただけれどさ、かみやちかおりさんって子、知ってる？」

神谷内香熾。

それは僕の名前だった。

事案だぞ。

帰宅するとまず留守電を消した。懲りずにあの男がまた録音を残していたからだ。馬鹿じゃないのか。死ね。

ご飯を炊いて、作りおきのおかずを温めて夕食にした。厚揚げ豆腐の味が優しかったが、無音の部屋の中で食事を取っていると、自分の咀嚼音がやけに響き渡る気がして、テレビを付けた。テレビの音がやけに響き渡る気がして、消した。

文化庁の男について考えた。いや、本当に文化庁だったのかは知れないなと思った。結局、名刺は突き返してしまって、受け取らなかった。作り物の名刺かもしれない。というか妖怪担当とか書いてある名刺が本当に文化庁にあるのだろうか。無いだろう。普通。妖怪担当ってさすがに何だよ。あと寄り道入道ってさすがに何だよ。

僕の名前を知っているのが気味悪かったので、僕はさっさと逃げ出してきた。いや、正確に言えば、男は、藤木圭吾は、それが僕の名前であるということは知らないようだった。ただ彼は、神谷内香熾というのは錦ヶ丘中学校の女子生徒であるということを知っているようだった。

文化庁の妖怪担当を名乗る怪しい男が、自分を探している。

もちろん良い気はしない。それ自体が気持ち悪いし、逆に僕以外の学校の生徒にあんな風に声をかけて、僕の名前を出して質問しているのだとすれば、僕の印象がものすごく悪くなるのではないか。とんでもない被害だ。

厚揚げ豆腐の味以外すべてが優しくなかった。僕は食後すぐに皿を洗った。

男が漂わせていた甘くて煙たい香りが鼻にこびりついたようで、離れなかった。

*

「ああ、香熾」

母は夜遅く、てっぺんを過ぎた頃に帰宅する。毎日。青白い顔を一層青くして。

「おかえりなさい」

「ただいま」

母は大きく息をつく。僕は冷蔵庫の麦茶をコップに注いで渡した。

「ありがとう」

蛍光灯の音がうるさい。

「香熾、今日、学校はどうだった」

僕は首をかしげた。

「いや、別に……」

「授業はどうなの」

「普通だけど……」

母は麦茶を飲み干し、コップを置いた。

「今日昼間、先生から電話があったのよ」

あ、まずったな、と僕は思った。

「神谷内さん、昼休みの間に帰ってしまったようなのですが、って……。具合でも悪かったの、香熾……」

「う、うん」

「そう……学校早退するときは、先生にちゃんと言いなさいね……」

そう言う母はますます老け込んだように見えた。

僕は明日からはちゃんと学校に行こうと思った。

母がこんなに働き詰めでいるのに、僕が学校をサボっているのはなんだかおかしいと思った。学校にいかないならせめて自分も働くべきだ。中学生にはろくなバイトもできないだろうけど……。いや、それもきっとダメだ。母は僕が働くのなんて認めないだろう。学校に、いかなければならないと思った。

そう決意すると、学校は一層邪悪な場所のように思えた。別にいじめられているとか、勉強が全く出来ないとか、そういうことがあるわけじゃないけど。でも、何だか僕は、学校という場所に、その集団に、馴染むことができずにいた。布団に入ると、醜悪な学校という空間に、死にそうな顔で出征する自分の姿が浮かんできた。ああ、いやだ。学校なんてなくなっしまえばいいのに、と僕は思った。

夢の中で学校を燃やした。

翌朝。

「ああ、香熾、先生から電話があったのよ……」

「え、なんて」

「今日は休校だって。火事があって、火はすぐ消えたけど、放火かも知れないから。警察が捜査してるって……」

怪火

学校が休みなので思う存分読書ができる。

僕は詩集を読み進めた。

「いやいやいやいや。ジャージ、なんなんそれ」

「……」

数ページも読まないうちに、また昨日の男が現れた。昨日とおんなじにおいがした。

「事案おじさん、また来たんですか」

「事案おじさんってさすがに何だよ」

「言葉通りの意味です」

「犀星読んでる文学少女が使う言葉じゃないよ。いやいやそれより、それ。ジャージ。なんだそれは。世界に喧嘩を売っているのか？」

僕はジャージ姿だった。だって学校休みだし。

「学校が休みだったら制服を着なくて良いのか？ 女子中学生としてもっと社会貢献してほしい」

「歪んだ社会貢献を求めな」

「……ん、なに、学校が休み？ サボリではなく」

「休みです。燃えたので」

臨時休校になった。明日授業があるかどうか分からない。

事案おじさんはふーっと息を吐き、天を見上げた。

「燃えちゃったかあ」

その目は、何かを考えていた。相変わらずくたびれた格好をしているけれど、一瞬、その表情に緊張が走ったように見えた。

「学校が燃えたとき、どう思った」

「どうって。ラッキーって思いましたけど」

「学校が燃えて得しちゃうタイプの人類か」

「むしろ学校が燃えて損するタイプの人類っているんでしょうか」

「次は何が燃えると得しちゃうんだろうね、君は」

「どういう意味ですか、それ」

その目がこちらを向いた。

「君は学校以外に何が燃えてほしいんだろうね」

「はあ……？」

「日本は火事の国だ。火事と喧嘩は江戸の華、っていう通り、江戸は木造建物が密集して火事が多かった。君の住んでいるこの金沢だってそうだ。北陸のフェーン現象で乾いた風が吹く。燃えやすい。辰巳用水って小学校で習っただろう？ 寛永の大火の経験から金沢城に引き込まれた用水だ。逆サイフォン。よく出来てるよなあ」

男は、この街の子供だったら誰でも知っているようなことを言う。土地の人じゃないんだろう

など僕は思う。

「そうやって防火には気を使ってインフラを整備していた加賀藩だが、宝暦の大火は防げなかった。宝暦の大火では、金沢の街は九割焼けた」

知ってる。

「宝暦九年四月九日、泉寺町、今で言う寺町から出火。火は翌日まで燃え続け、犀川を超えてまで広がり、浅野川まで超えて、金沢城を含め、城下一万戸以上が消失」

僕は郷土史の教科書に書いてあることを諳んじた。

「詳しいね、さすが学校が燃えて得しちゃうタイプの人類」

男が感心したように言った。

「ここらの子供なら皆知ってるでしょ」

この街の史上最悪の火事なのだ。知らないわけがなかろう。

「じゃあきつと、その火事の原因も知っているだろうね」

「……だからフェーン現象じゃないんですか」

春先に日本海を低気圧が通過すると、乾いた風が吹き下ろす。それが火災を広げやすい。

「違う。昔の人はそうは考えなかった。かわりにこう考えたんだ。『加賀騒動で自害した大槻伝蔵の祟りだ』。加賀騒動、知ってる？」

加賀騒動。加賀藩のお家騒動である。僕は頷く。

「詳しいね、さすが放火少女」

「ここらの子供なら皆……え、なんて？」

「火事はよく祟りだとか言われる。まあ、わかりやすいだろ。炎。怒り。恨み。イメージが近いんだ」

「放火ってなんですか」

「学校が燃えたのも、誰かが祟ったのかもしれないねえ」

「あの」

男がすうと深呼吸した。また一瞬、甘くて煙たいにおいがした。

「さて話が寄り道しすぎたね」

さすがに寄り道入道ってなんだよ、と僕は言いかけた。

「ところで、君が神谷内香熾さん、その人なんだってね、同級生に聞いたよ」

「……」

黙った。

事案だぞ。

「ということは、君は、神谷内直樹の娘なわけだね」

僕は今度こそ本当に眉を顰めた。

父の名前を出して近づいてくる人間に、ろくなのはいないだろうと直感的に思った。

「お父さんに、鼠の話とか聞いたことある？」

「は？」

「お父さんは、親戚づきあいってする方だった？」

しない方だった。僕は声に出して答えはしなかったがそう思った。

「じゃあ、何も聞いてないんだね、まあしょうがないか。君は」

男が短い袖を引っ張って話すのが、気に入らなかった。

「その本もお父さんの本なのかな」

「……」

「お父さん、まだ若かったのにねえ、中学生の娘を残して」

「……」

「それもお父さんの本なのかな。まあ女子中学生が普通買わないだろうしね、そんなの」

「……」

「でも別に、お父さん事故死でしょう、その本にお父さんが君に伝えたかった何かを書いてあるってわけではないしさ」

「……」

「学校行かずにそれ読むの、お父さんが君にしてほしかった事なわけ？」

僕はものすごい顔で男を睨んでいたのだろうと思う。男はにやりと笑った。

急火

日が落ちるとやっぱり少し肌寒い。星は見えない。月は出ていない。曇った空は街灯りを反射して、どんよりと薄黒い。僕はスクールバッグから水でない方のペットボトルを取り出し、地面に立てて置いた室生犀星詩集にゆっくりとその液体を注いだ。

素敵な本でした、お父さん。ありがとう。

油の臭いに鼻の奥がくすぐられる。

われまづしき詩篇に火を放ち――

僕は安物のターボライターで、本に火をつけた。炎が本を駆け、紙を舐めあげる。ページが四隅からくるくと巻き込まれ、黒く灰になって空気に染み込んでいく。

父が僕のために残してくれた本を、僕は読み取り、吸収し、そして父の棺に入れてあげられなかった本たちを、こうして火葬するのだ。

本は黒ずんで灰の塊になっていく。遠くで消防車のサイレンの音がする。まさかこれを消しに来るわけではあるまいと思うけれど。

全部燃えてしまえと僕は思った。

人間最後は灰だ。

父の死は突然だった。特に何の変哲もない事故死だった。気持ちが追いつかなかった。葬儀は無難に済んだ。すべてが滞りなく終わって、手元に父の蔵書が残っているのに気づいた。

俺が死んだら一緒に燃やしてくれ、と言っていたのを思い出した。

この本は燃やされるべきだったのに、燃えていない。その事に気づいて焦った。

けれど、僕は四十二冊目をこうして読み終えて、こうして父の跡を追いかけてさせることが出来た。

炎が尽きて、灰の塊が燻る。遠くで消防車のサイレンの音がする。犀川の河原は薄暗い。街灯の類は限られていて、川に近いここまで照らさない。橋や街の灯りだけが見えて、世界から置いてけぼりにされてしまったような空間がここにはある。燃え尽きて風に飛ばされた灰の行方も、闇の中で知れない。きっといくらかは犀川に落ちて、海まで注ぐかもしれない。僕はそれを想像する。自分が灰になって、海に至るのを想像する。

甘いような、煙たいような、不思議なおいがした。

いや、煙たさが三割増した。

「やあ、神谷内くん、ここにいたんだ」

男は焦げていた。

髪の毛はチリチリで、頬は煤け、わかりやすい焦げ姿だった。服もところどころ焦げており、ジャケットの袖なんかは焦げてさらに短くなったみたいで、むしろ本来はちょうどいい長さだっ

たようにさえ見える。わかり易すぎる焦げ姿は滑稽で、僕は昼間のイラつきが消えてしまうというか、振り上げた拳の行き場がないというか、空振りした気分だった。

せいせいする。

ざまあみろ。

「何してるんですか、ここで」

「悪いやつの取り締まり」

「悪いやつって」

「放火魔とか」

「放火魔？」

僕はさり気なく、全然さり気なさを装えてなかったけれど、足元の石を動かして灰を多少なりとも隠した。

「見ての通り、ホテルから焼け出されてね」

「放火されたんですか」

「俺はそれを疑っている」

「このあたりに犯人が？」

「俺はそれを疑っている」

「ふうん、怖いですね。じゃあ僕はそろそろ帰ります」

「神谷内くん、ところで君は、一時間くらい前はどこでなにをしていたのかな」

「家で、本を読んでいました」

「お母さんは？」

「仕事」

「じゃあ家には一人だったんだ」

「そうですね」

「誰にも会っていないんだ」

「そうですね」

「そのペットボトル、お茶？」

「……」

「それともミネラルウォーターかな？ 俺随分焦げちゃったから、水分が欲しくなっちゃったな、ちょっと分けてもらえない？ 未開栓？ 未開栓じゃなくてもいいけど」

「事案だぞ」

「むしろ事件になるのかもね」

男は袖を引っ張ったが、煤けた袖は破けてしまった。

「事件入道かな」

事件入道ってさすがに何だよ。

金沢三文豪といえば、泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星の三人である。この土地から文豪が三人も出ているというのは、それだけすごいいことなんじゃないかと僕は思う。泉鏡花と徳田秋聲は二歳違い。小学校まで同じ。僕はその小学校の出身だ。だから僕にとっては泉鏡花と徳田秋聲は、なんだか馴染みのある名前だ。作品をちゃんと読んだことはなかったけれど。

泉鏡花と徳田秋聲の二人の関係は不思議だ。二人共、尾崎紅葉門下だったのは共通点。鏡花は尾崎紅葉を崇拜し、尾崎紅葉も鏡花を溺愛していたというのは有名な話だ。一方の秋聲は、紅葉門下四天王（鏡花、秋聲、小栗風葉、柳川春葉）としては地味な存在で、その時期の活躍は、これまた地味だ。

秋聲は一度、紅葉に入門を断られている。東京は牛込を訪ねていったが、紅葉は不在。仕方なく原稿を郵送したところ、「柿も青いうちは鴉も突き不申候」という言葉とともに返送されてきてしまう。秋聲はその手紙を破り捨て、以来放浪生活を送るようになる。

彼が牛込の秋聲の自宅を訪ねたとき、玄関番をしていたが他ならぬ鏡花だった。

「先生は今ちょっとお出かけですが……」

と、言った鏡花は十八歳。一年前に上京し、紅葉門下に入り、書生生活を送っていた。追い返された形となった秋聲は二十歳。

なんだか手紙を破りたくもなる気持ちが見えるなあ、と僕は思う。

僕が河原で、四十三冊目の秋聲の自伝小説を読んでいると、男が声をかけてきた。

事案おじさんではなかった。

「香熾ちゃん」

「死ね」

僕は素早く答えた。

「死ねは良くない」

立っている男は宮本という名前の、父のかつての同僚だった。父が突然事故死してから、葬式やら何やら、何かと世話を焼いてくれた男だ。優男然として、父とは同年代だというが、見た目は父より若々しい。いつもニコニコと微笑を浮かべている。だがクズだ。この男は最近、母に露骨に言い寄っているのだ。死ね。

「ごめんね、読書の邪魔だったかな」

「読書に限らずすべての面で邪魔」

「ひどい。香熾ちゃん、ちょっと話がしたいんだけど、いいかな」

良いわけがなかったが、走って逃げるのも癪だったから、僕はそのまま聞き流してやろうと本に目を落とした。全然文字が入ってこなかった。

「話くらい良いじゃない」

「死ね」

「死ねはよくない」

うるさい死ね。今からお前の名前は死ねだ。

僕は本の文字を頭にいれるのはもう諦めたが、しかし本から目は離さなかった。言いたいことがあるなら勝手に言って、さっさとどっかに行ってくれ。

「ほら、香織ちゃん、ちょっと付き合ってよ、そんなにツンツンしないでさ」

死ねはなおもそう言った。いかげんに宮本。

「ここじゃなんだしさ、お茶でも飲みながら話そうよ」

一拍おいて、その言葉の意味を読み取って、僕はちょっと愕然とした。

事案おじさんにべらべら話しかけられるのに慣れてしまって、話というのは河原で座ったままするものだという感覚になっていた自分を発見したのだ。そうだよ、普通大人の男が話をしようと言ったら、喫茶店くらい行くものじゃないか。

僕は腹がたったので、喫茶店で一番高いメニューを注文してやろうと思って立ち上がった。

*

結局、日和ってカフェオレにした。

貸しを作るのも良くないから仕方ないということにしておく。

「僕の留守電を消してるだろ、香織ちゃん」

ニコニコと気持ちの悪い笑みを浮かべて宮本はオレンジジュースを吸った。オレンジジュースで。ガキか？

入ったことがない喫茶店だった。壁掛け時計がやたらと多い。丸いの、四角いの、丸の下に五角形の胴体がついているの、たくさんある。振り子が付いたタイプのものが半分ほど。規則正しく時が刻まれていく感覚が心地良い。はずだ。こいつがいなければ。

宮本は、最初は確かに親切で、頼りになった。しかし、だからこそ厄介だった。母にしてみれば恩がある相手であろうし、その宮本が家に立ち寄るのも、連絡してくるのも、真っ向から拒否するのは憚られるのは無理なかった。ただでさえ働き詰めで母は疲れているのだ。余計な心労を増やすこの男の存在が、心底邪魔だった。僕を「父親を亡くして精神が不安定になっている思春期の女の子」みたいに扱おうとして、見え透いた微笑を浮かべているのも大嫌いだった。アクセントが違うから、この土地の人間ではなさそうだ。父もかつて勤めていた会社だが、さっさと潰れると思った。そうしたらこいつもここからいなくなるだろうかと思った。

「香織ちゃんがお母さんのこと心配なのはわかるよ。でも、お母さんが苦しんでいるのもわかるだろう？」

全然全くこいつが何を言っているのか本当に1ミリもわからなかった。早く死んでほしい。ああ、ここ1週間くらい僕は本当に精神が不安定なんじゃないかと思った。わけのわからない事案おじさん、変な火事、そしてこの男。精神がぐらぐらする。

「秋保さんも、きっと香織ちゃんのことを心配なんだ」

神谷内秋保。母の名前だ。なんで下の名前と呼ぶ。次に秋保さんとか呼んだら殺すぞ。

僕は心のなかで最終警告した。

次に秋保さんとか呼んだら殺す。少なくともこのグラスの水はぶっかける。

「秋保さんを自由にしてあげないと」

一歩遅れて、自分がテーブルを叩いて立ち上がったのがわかった。

バン、と結構大きな音がして、実際僕は自分が水のグラスをひっつかんで投げたのかと思った。

そんな感覚はなかったけれど、怒りに任せてそういうことを自分がしたのかと思った。

自分が実際に何をしたかよりも先に、やってしまった、という直感が先に来た。

実際には、僕はグラスを投げたりしていなかった。

というか、多分何もしていなかった。

そのはずだった。

けれど宮本の顔は引きつっていて、いつも張り付いている微笑が消えていて、宮本の背後の窓ガラスが割れていた。

宮本の背後の窓ガラスが割れていた？

割れた空間の向こうに見えるのは美しき川、そしてそこにかかる犀川大橋で。

青々と輝く犀川大橋の上で、何かが燃えていた。

炎が上がっていた。

……炎？

それはありえないくらいよく見えた。

いや、あり得なかった。

見えすぎていた。

犀川大橋に並ぶ車が爆ぜ、燃え、弾けて、火柱が、炎の柱が、青い橋を焼き、青い空を焼いている。すべてを灰にしてしまう炎が、あらん限りの怒りでもって、八つ当たりのように、神罰のように、それが僕の、普通の人間の視力では絶対に見えない距離の遠くのそれが、まるですぐ手元にあるかのように、炎の舌先の一つ一つまでもが、

「はいはい注目！ 皆さんこっち！ 注目！」

騒然となった喫茶店に誰かが飛び込んで来て叫んだ。

「みなさんこっちを見て！ 聞いて！ 耳と顔こっち向けて！」

妖怪担当の藤木だった。

「緊急ニュースです！ 聞いてください！」

藤木は携帯電話くらいのサイズの何かを、高々と掲げた。

——▼▼▼▼

ん、なんだこれ。

——▼▼▼▼▼▼▼▼

その何かから発せられる音は、言葉であり言葉ではなく、音楽であり音楽ではなく、記号であり記号ではなく、音響であり音響ではなく、記憶であり記憶ではなか

「あっれー？ マスター、まだあのままなんですか、あの窓」

藤木が唐突に言った。何かはもう掲げていない。

あっれー？ マスター、まだあのままなんですか、あの窓。
と、彼は言った。

振り返ると窓が割れていた。あれ、こんななってたんだ。気づいてなかったな。

ああ、『あのまま』って、割れたって意味か。あのままってことは、昨日とかに割れたのかな？ それがそのまま放置されているってことか。マスターもどうして直さないんだろう。不思議だ。

「昨日子供が遊んでたボールで割れちゃったやつですよ。修理呼びました？」

マスターは目を瞬いている。

ああ、昨日子供が遊んでたボールで割れちゃったのか。そういうことはまあ、あると思う。子供の遊びならあまり責められないし。雨が降る前になおした方がいいよな、と僕は思った。防犯的にもよくないだろうし。

「まだ呼んでないんですか？ ダメですよー、今日は天気良いから良いけど、雨降ったらどうするんですか。俺呼んであげますよ。良い工務店知ってますから」

そう言うと藤木は携帯電話を取り出し、僕の手を掴んで店の外に連れ出した。

「喫茶店の主人をマスターって呼ぶやつさ、俺一回やってみたかったんだよな」
まだ藤木は若干焦げ臭かった。

車の中は、例の甘いにおいがした。

かなり強烈に、レモンとシロップと草を煮詰めたみたいなの、甘くて煙たいにおいがこびりついてた。僕は頭がクラクラした。なんでこんな車乗っているんだろうと思った。あれ。なんでこんな車乗っているんだろう。

「どこへ行くんですか」

「まずは街を一周。君の気配をある程度散らしておかないといけないから」

「僕の気配を？」

「ああ」

「.....どうしてですか」

「君が喫茶店の窓を破壊して、その先にある犀川大橋の車を爆発炎上させたからだ」

その瞬間、意識が高速で巻き戻った。自分がカッとなって、何かをしでかしたらしいことに気づいた。せき止められていた、マスクされていた情報が一気に意識に流れ込んで、洪水のように大混乱が起きた。

「ぼ、僕はさっき、何を」

甘くて煙たいにおいが喉に絡んで、吐き気がする。

藤木は運転席の窓を少し開け、ポケットから取り出した何かを外に捨てた。すぐに窓を閉める

。

「あの。これ、何に追われて」

僕たちは何から逃げているんだ。

「公務員」

「公務員？」

「国家公務員だよ、俺なんかと違って、荒事が得意な奴ら。実力行使部隊」

なんだそれ。どういうことだ。

まるでわからない。

藤木がドアポケットをゴソゴソと探る。

「ほい」

とんと胸に押し付けられたのは、ペットボトルのお茶だった。

「飲んで落ち着きな」

未開栓だった。

*

藤木は運転を続けながら、クラッチバッグから器用にノートを取り出して、僕に渡した。

「さすがに説明しないといけないね」

A4罫なしの白紙に、太めのボールペンで図が書かれている。

名前。線。名前。線。名前。

達筆だった。線と線の平行がきっちりとれている。

「……これ、家系図ですか」

「そう」

それは、長い長い家系図だった。てっぺんに書かれているのは前田利家という名前である。

「戦国時代？」

「さすが、郷土愛だね」

別に金沢人でなくても前田利家くらいわかるだろうに、と僕は思った。

右下の隅に、僕は自分の名前を見つけた。

「僕は前田利家の血を引いてるってことですか？」

変な声が出た。自分の家系図なんて見たことがない。祖父母より上は全く知らない。

「いや、それはまあ、家系図ってというのはそういうものだからね。何のために家系図を作るかって、それは家の由緒を主張するためなんだから。これは僕が省略しているから前田利家までしか書いていないだけ。真剣に家系図というものを作るなら、むしろ前田利家程度で始まるのは変だ。前田利家は菅原道真の後裔と言われているし、ということは土師氏にルーツがあるわけだから、家系図を書くならばスタートは天穗日命であるはずなんだ」

自分の先祖が神様になってしまった。

「まあ、上の方は良いんだよ。問題は途中から始まる丸の付いている人々だ」

「丸って」

確かに家系図の途中から、丸がついている。それは紙面左側のスペースに点在し、しかし、どの丸にも斜めに線が引かれている。ちょうど、ギリシア文字のφみたいに。

「神谷内くんは憑物筋って知っているかな」

「いえ……」

「憑き物と言われる動物霊が、家系に対して憑いているという考え方があった。狐がメジャーで、管狐とか、オサキとか、聞いたことないかな。あと犬も。犬神家ってあるでしょう」

全く聞いたことがないわけではない。

「ま、北陸ではあんまりメジャーではないね」

また車が犀川大橋の横を差し掛かる。何回目だろう。この車は市街をぐるぐるぐるぐる回っている。さっき燃えた車が、レッカーで移動されていた。犀川大橋が封鎖されたことで周囲はひどい渋滞だ。炎が触れた部分の青い塗装が、真っ黒く焦げている。

藤木は窓をまた数センチ開けて、何かを放り捨てる。最初はタバコの吸い殻をマナー悪く捨てているのかと思ったけれど、明らかに吸ってなんかいない。

「憑き物というのは動物霊で、名前の通りその家の人間に憑くわけだけれど、悪さをするわけじゃない。いや、悪さはするのか。少なくとも、憑かれている人間に対して、憑かれている本人に対しては、害をなすわけじゃない。曰く、あの家は憑物筋だ。あの家の人間は、管狐を使って、盗みをする。邪魔者を殺す。大体はそういう噂が流れる」

「その家の人の言うことを聞く妖怪、ってことですか」

「そうだね」

僕は、手元の家系図の丸印を見る。いずれの丸にも、上から斜め線が引かれている。斜め線が引かれていない丸が、まだ生きている丸が、一つだけある。

僕の名前の上に、それはある。

「君たちの場合は、鼠だ」

ネズミ……。

「僕の家系に、僕に、鼠が憑いている、っていうんですか」

「けれど、君には見えない。その家系図で見たら分かる通り、君は傍系の傍系なんだ。本来なら、鼠の方は君を見つけることなんてできなかつたであろうほど、離れている」

僕は本当に紙の端の方にいる。

僕は自分のすぐ上にいる父の名前を見た。

予想に反して、丸はついていなかった。僕は父から憑き物を引き継いだというアイデアが、一瞬そんなに悪くないもののように思えたのだが、急に薄ら寒くなった。

「三ヶ月前、本筋の唯一の男の子が亡くなった。交通事故だ。それで、おそらく鼠は主人を見失った。この鼠は、成人には憑かない。ところが本家本筋には成人が一人もいなくなってしまった」

紙の端の方の僕の名に、丸い印が付いている。

「しかし、鼠は幸運なことに、君を見つけた」

丸い印が、憑いている。

「君は不運なことに、鼠に見つけられた」

丸い印は、黒のボールペンで書かれているのに、燃えている。

「君には鼠が憑いている。本来力のない君には見えないけれど、火鼠が憑いている」

火鼠。

僕は思わず、自分の身体を見下ろした。自分の両手を見つめた。

「だから君には見えないんだって。気配も感じられない」

「……さっき、車が燃えたのは」

「そうだよ、君に代わって、火鼠が燃やしたんだ。危なかった。車じゃなくてあの男を爆発炎上させてしまっていたら、さすがの僕とて庇いきれないところだったね」

僕は身震いする思いだった。自分の両手が急に遠くに見えた。

「しかし、これだけ長い間この妖怪は生きてきたのだから、今度もうまくやるさ。文化庁の立場としてはね」

「うまくやるって」

「でも放火少女には似合いの憑き物じゃないか。火鼠が君を発見したのは、もちろん君が、お父さんを亡くして以来、やたらと火を使っていたというのがトリガーだろうね。本を燃やしてたの、見てたよ。何冊燃やした？」

四十二冊。

言わなかったけど。

「そこを媒介にして、つまり君の精神と火の接近を使って、火鼠は入りこんだんだろう。あとはそう、名前だね。君の名前。珍しい漢字じゃないか」

「父がつけたそうです」

「そっか」

理由は知らない。父に聞きそびれたことがたくさんある。

「ああ、そうだ、神谷内くん、この間はお父さんのことでひどいこと言って、ごめんね。いや、君がああ場で僕を燃やそうとすることを期待していたんだけど……。対人ストレスでカッとなった時に発現しやすいそうだから、そこで姿を確認したかったんだが……」

「はあ……」

それで、ああ場でこの人を燃やそうとしていたらどうなったというのか。僕は、いいアイデアとはとても思えなかった。

「学生時代の先輩でね」

藤木がぼつりと言った。

「……父のことですか」

「そうだよ。神谷内先輩。まあ大学出た後はほとんど会わなかったなあ。君は覚えてないだろうけど、通夜にも出たよ」

全く覚えはなかった。親戚ですら誰がいたのか覚えていない。

「本音を言えばさ、お父さんの本を読むのは良いことだと思うよ。きっとお父さんも喜ぶさ」

藤木は目を細めて言った。

「燃やすのはどうかかわからないけど。でも、一つ言えるのは、別に、ゆっくり読めばいいんだよ、君は」

僕は何も言わなかった。

「全部読んで、全部燃やすまで、他のことをしちゃいけないってわけじゃ、ないんだからさ」

藤木が父の話をしてくれるかと思って、僕は黙っていたけれど、藤木はそれきり何も言わなかった。

車内には甘いにおいがずっと漂っている。

「……さて、そろそろつくわけだが」

気づけば車は市街地を離れ、おそらく北の方へ向かっている。

「君たちの家系も、当然その火鼠との付き合い方を心得てきた。それを飼いならし、辺り構わず火の海にしてしまうことがないように、制御下に置く方法が、当然に存在する。というか、そういう方法が存在するからこそ、火鼠は駆除されずに生き残っているわけだ」

山道を登る。ぐるぐると登る。

「我々文化庁の役目は、君とその火鼠に決定的な触法行為を回避させ、穏便に人間社会と共存することを選ばせることだ。いま、神谷内くんは君の家系が本来持っているべき知識を持たない。下手をすれば、公安に消されてしまう。貴重な妖怪が失われるのは防がなくてはならない」

車が木漏れ日の中を走り、ツンと鼻につくにおいがする。

「例えば君が、人を死に至らしめるような火付けをしてしまうと決定的にまずい。だからその前に、火鼠を封じる専門の技を持つ施設に行く」

「お祓い、みたいな感じですか」

「まあ、雰囲気としてはそんな感じだと思うよ。実際その施設というのも神社だからね。お祓いに近いイメージだ。ただ、火鼠を祓うわけじゃない。憑物落としをやって、火鼠が違う子供のところに行くだけだからね。君からしたらそれでも良いかもしれないけれど、結局他の人のところで同じ問題が起きる」

カーエアコンが外気を取り込んでいるからだろうか、車内の空気は、ひどく冷たくて、そして、煙臭い。

「だけどこれは」

山道が開けて、車が駐車場代わりの砂利を敷いた広場に入ると、空は赤々と燃えている。

燃えている。

燃えているのだ。

「決定的にまずいのかもしれないなあ」

その神社は。

その神社は炎上していた。

炎の中に鳥居が浮かび上がり、もうもうと立ち上がる煙が赤く染まる。

僕は思わず、また自分の両手を見た。

火鼠がチュウと鳴くような気がした。

「なんなんですか、火鼠って。本当に僕に何か憑いているんですか。どうすれば良いんですか。さっき言ってた公安ってなんですか」

混乱していた。

「僕、これからどうなるんですか」

神社は完全に燃えていた。消防車のサイレンが聞こえてきて、藤木はすぐに車を出した。山道を消防車三台とすれ違う。僕はさすがに震えが止まらなかった。

「公安はもう君を追ってない。俺と移動している限りは安全だから、大丈夫。いや、でも日宮神社まで燃やされたのは俺の不手際だ。失敗した。申し訳ない」

申し訳ないなんて言わないでくれ。なんとかしてくれ。

「神社は燃えて使えない。おそらくだが、火事で誰か殺してしまうと困るのは鼠も同じはずだ。そこまで馬鹿じゃない。だからきっと、さっきの火事も死人は出てないはずだし、神職は生きている。とはいえあの状況では神社には近づけない。公安にすぐ見つかったら」

「だから、公安って何なんですか」

「俺たち文化庁が手懐けられなかった、人間社会と共生できないと判断された妖怪を――あいつらは妖異と呼んでいるが――無害化する仕組みだ」

「無害化……」

「まあ要は消すわけだ。でもそうはさせないさ」

消すってどういうことですか、とは怖くて聞けなかった。

「どうするんですか」

運転する藤木は、はじめて会ったときと同じ、妖しくて悲しい目をしていて。

「プランBだな……」

僕は黙って震えた。

「火鼠について話そう」

藤木が言う。

「例えばだ。言っちゃ悪いけれどさ、神谷内くん。君の家はあんまり裕福とは言えない。お父さんのこともあったしね。けれど学校には、君と違って裕福な家の子供もいるだろう。そういう家の子供のことを想像してくれ。そういうやつらが、憑物筋だったら、どうだい。どう思う」

「……かわいそう？」

「はっは、そりゃ随分お人好しだな。それは君がいま、望まない憑き物に困っているからそう思うだけだろ。自分がかわいそうってか。見方を変えてみなよ」

「怖い？」

「まあ、それは合ってるな。憑き物をこっちにけしかけられたらと思うと怖い。その通りだ。そうじゃなかったら？ 他には？」

「……」

「そいつはすごい金持ちだったりするわけだ。時流に乗ってる、調子に乗ってる奴らなわけだ。」

それが憑物筋だと露呈した。どう思う」

「……ずるい？」

「そういうことだ」

……わからない。

「憑物筋っていうのは機能だよ。ずるいという感情、嫉妬、怨嗟、そういうものが生み出した機能だ」

僕には意味がよくわからなかった。

「狐を使って裕福になったんじゃない。犬で呪って成り上がったんじゃない。逆だ。成り上がり者で、裕福で、ずるいから、『憑き物を使ったに違いない』んだ」

「……どういう、意味ですか」

「憑き物という存在は、物理的にそこに見えているわけじゃない。だが、いたほうが都合がいいんだ。だって、ずるいやつらが、恵まれている理由ができるし、ずるをしているということになるから叩けるじゃないか。そういうことなんだよ、憑物筋っていうのは」

ずるをしている、恵まれすぎた人間。それに、妖怪が憑いている。憑いていることになる。憑いているとして迫害される。

「たいてい村八分にされるんだよ。下手したら殺される。そこで整合性が取れるように、『管狐が憑いた家は栄えるが、やがて管狐が増えすぎて家が食いつぶされる』なんて設定が付け足されたりするわけだ。家が潰されるのは周りから圧力がかったからってだけなんだけど、っていうか自分たちが圧力かけたからなんだけど、加害者はそれを認めないわけ。あくまで憑き物のせいにする」

「……憑き物なんていない、って言ってますか」

火鼠なんていない、って言っているのか。

「うん、だからそれで言うと、おそらく君のご先祖様も、火に関係して何か良い思いをしたんだろう。それで火鼠を使ったに違いないとなった」

「……鼠はいないって、言うんですか」

「残念ながら、何もいないわけじゃない。火のないところに煙は立たない。ただ、鼠は後付けっていうだけだよ。『鼠のしょんべん』の話、知ってるだろう。あそこから来てるんじゃないかな。つまり相当現代になってから、鼠になったわけだ。本当は、鼠憑きじゃなくて、怪火憑き」
怪火憑き。

「なかでも君は運が悪かった。いや、運が良かった。良すぎた。不審火のお陰で、全部得をした。してしまった。そのせいでかなり強くなっている。安全に鎮められるラインを超えている」

「学校が燃えて学校にいかなくて良くなった。俺のホテルが燃えて憂さ晴らしになった。犀川大橋の車だけは的が外れたが、これだって見方によっては、宮本本人を燃やしてしまわなかったのは得だったと言える。あ、いまかなり屁理屈だって思っただろう。そうだよ、憑き物は一度ついたら、屁理屈だって離れない。そして神社はまずかった。神社が燃えたから、火鼠は抑えつけられることも未然に防いで、力を温存できた。これは大きい。力がある場所を燃やしてしまった。君と火の結びつきももともと強すぎる。もう普通の鼠じゃない。これだけ火事が立て続けている

以上、君には『相当の力を持った火鼠が憑いているに違いない』、という状況なわけだ」

「それで、君は、次は何が燃えると都合が良いんだろう？」

埋火

犀川大橋での火事で怪我人は出ていなかった。

日宮神社の火事でも怪我人は出ていなかった。

それだけ確認すると僕は部屋に閉じこもって布団にくるまって目をつむっていた。他のニュースなんて見たくない。もし火事が起きていたらどうするんだ。考えたくない。消防車のサイレンの音がする。音がするような気がする。顔が熱い。炎が燃えて、熱を発しているみたいに熱い。この家も燃えている。燃えているような気がする。僕の身体を炎が駆け巡っているような気がする。僕の身体を炎が舐める。四肢が燃え、燃え残った僕の神経がパラパラと崩れて灰になる。炎が橋を焼いている。炎が街を焼いている。火鼠が部屋を駆け回る。頭が燃えて焼ききれる。悲鳴。炎と熱。灰。人間みんな灰になる。燃え尽きる本。父の蔵書。父の灰。母の悲鳴。次はきっと殺す。燃やし殺してしまう。自分がどこまで何をしでかすのか分からない。自分が何を考えているのか分からない。驚愕する宮本の顔。あんなやつ死ねばいい。死ね。本気でそう思っていた。思ってきてしまった。だから燃やししてしまうかも知れない。消防車のサイレン。人間みんな灰になる。炎が血管を焼き尽くす。それが燃えると得をする人間がいる。皮膚が髪が焦げる嫌な臭い。悲鳴とサイレンと悲鳴とサイレンと悲鳴とサイレンと悲鳴と

ピンポン、と間の抜けた音が鳴る。

消防車のサイレンではない。

ピンポン、ピンポン、と来客を告げるチャイムが鳴る。

家には僕一人しかいない。

ピンポンピンポンピンポン、とチャイムが鳴らされる。

誰だ。

公安かも知れないという不安がよぎる。全身がこわばる。

「神谷内くーん」

……藤木の声だ。

僕はのろのろと立ち上がり、玄関の戸を開ける。

「ああ、ごめん。寝てた？ ……いや、眠れはしないか」

藤木は例によってくたびれたジャケットを着て、陰鬱な顔をして現れた。

僕はとりあえず麦茶をコップに入れて差し出した。

「ありがとう」

藤木は一気に飲み干した。

「冷蔵庫から麦茶が出てくる。実家のような安心感だな」

お前の実家ではない。

事案おじさんとか言っていたのに、その男を自分一人しかいない家に上げている状況に気づ

いて、僕は随分遠くに来てしまったような気がした。変な感じがする。

「今日の火事は一件だけだ」

「……！」

急に言われて、心臓が止まりそうになった。

「君が心配していたとおり、お父さんの働いていた会社のビルだ」

僕は顔をあげられなかった。頭にかっと血がのぼり、口をパクパクするしかできない。

「大丈夫、誰も死んでない。怪我もしていない。事前に手を打ったから」

藤木はマジシャンが手品を披露する前にやるみたいに、手のひらをこちらに向けて揺らした。誰も死んでない。

怪我もしていない。

それで僕は少しだけ、本当に少しだけだけれど安堵する。

「手を打った……？」

「怪文書を入れた。怪火には怪文書。稲荷神の祟りである、大阪へ帰れ、って書いてね」

「なんですかそれ……」

お稲荷さんどっから出てきたんだよ。

「まあ、祟りと言えやお稲荷様ってだけだよ。あまりにもありふれているから、祟りを騙っても祟られないくらいで」

その態度は祟られそうだな、と僕は思った。

「それで、脅迫の類だって言って、警察にも連絡が行った。まあでも、警察もまともに取り合わないよね。そんなの。だから普通に仕事してたんだけど、突然オフィスの天井から火が出た。言ってもたいしたことない火だよ。すぐ消された。でも支店長席に燃えた天井が落ちてくるっていうビジュアルは、その視覚効果は、結構大きかっただろうね。それだけ。鼠はそれだけで良かった。だって、俺が鼠の代わりに、大阪へ帰れって、言ってあったから」

「火鼠とすれば、宮本を消すにはどうすれば良かったっていうのは相当な難問で、放っておけば実際、焼き殺すという手段を取ってしまう危険があった。けどそういう脅迫状が届いた後ならば、なんでも良い、ちょっと不審火を出すだけで事足りる。きっとあの会社、金沢支社は引き上げるよ。そうすりゃ宮本も大阪に戻ることになる」

「……そんな簡単に、いくもんですか」

「いくね」

藤木は当然のように言った。

「理由は後からついてくる。会社の中の誰かが最近稲荷神の祠を壊したとか、どこそこの土地はもともとは神社だったとか、くだらない理由を、誰かが絶対に探し出す。祟りってそういうものだからね。運が良すぎたら、妬まれて物が憑くのと同じ理屈さ。あそこまで明解に怪火が出たら、人間は理由探しをやめられないものだよ。もしこの不審火が加賀騒動の直後だったら、これも大槻伝蔵の祟りにされていたらさ」

んな無茶な、と僕は思った。

「さらには、ちょっと調べた限りでは、あの金沢支社の経営状態はあんまりよくない。撤退理由

が出来て良かったじゃないか。中小企業はフットワークも軽いさ」

「……」

「だから誰も死んでいない。怪我もしていない。けれど、宮本という邪魔者は消える。君の人生から退場する。君と火鼠はまた勝利してしまった」

火鼠がチュウと鳴く。勝ち誇って火花を燻らす。

実際にあの軽薄な男が、会社がなくなってもなおこの街に残ったり、母に会いに来たり、そういうことをするとは思えなかった。彼が人生をかけるとは思えなかった。

「けれどこれでは、君は毎日、ずっと、火に怯えながら生活しなくてはいけなくなってしまう。俺がやったみたいな操作を加えないと、人に危害を与えてしまう可能性もある。君と火鼠はラッキーすぎた。序盤で勝ちすぎた。掛け金をつり上げ過ぎた。安全に着地出来ない状態だ」

藤木はクラッチバッグをごそごそやって、錠剤の入った瓶と、御札のようなものを取り出した。

「だからこれがプランB。不便なのは月に一度だけ。これを君に貼り付ける。満月の夜には薬も飲んでもらう」

「……どうということですか」

「神谷内君、君には狼になってもらおう」

そうして僕はなった。

狼に保護され、狼を保護する人間に。

三週間引きこもっていた。

メールが届いた。

狐からのメールだ。

お呼び出しを受けた僕は、待ち合わせ場所に三十分も早く着いてしまった。落ち着かないからあたりをそぞろ歩き回る。久しぶりに外出した。太陽が眩しい。

メールには話がしたいと書かれていた。

それを見て胸が高鳴らないといえば嘘になるけれど、でも同時に、胃がむずむずして、心臓を気持ち悪い冷たい水に舐められているような、不安に僕は襲われていた。

なぜ稲荷木燈花は僕に化けていたのか。

なぜ稲荷木燈花は僕に化けていることを僕に露呈させたのか。

稲荷木燈花は僕の反応を試していたのではないか。

稲荷木燈花は僕の反応を見て愉しんでいたのではないか。

稲荷木燈花は僕を馬鹿にしていただけだったのではないか。

そして僕が引きこもってしまったら稲荷木燈花から連絡が来なくなった。

ほら、やっぱり稲荷木燈花は僕の反応を見たらもう僕には飽きてしまったのではないか。

やっぱり面白半分でドッベルゲンガーごっこをしたのではないか。

もう僕には興味がなくなったのではないか。

そんなことばかり考えてのたうち回っていた僕にとっては、少なくとも僕と接触を図ろうとするメールは救いでもあったし、地獄でもあった。

会って話してしまえば、答えが決まってしまうから。

いやもちろん、そんなのひどい被害妄想だとは僕だって思っている。普通に考えれば、稲荷木燈花はちょっと、いや、著しく空気が読めず、著しく思いが重い女の子で、僕の興味をひこうとして僕に化けたんだと、客観的にはそうであろうと僕だって思う。いや……でも……。案外、そう思うほうが自意識過剰なんじゃないだろうか。普通に、そんな都合のいい妄想みたいな話があるだろうか、やっぱり、燈花は別に僕に興味なんか、

堂々巡り。僕は特に意味もなく、東京ドームの周りを一周した。堂々巡り。ドームドーム巡りだった。ドムドムバーガーって食べたこと無いんだよなと僕は思った。うちの近くにあるらしいけど、駅と反対方向だから行かないんだよな。

無理やりどうでもいい方向に思考をねじ曲げようとしたらすぐ止まってしまった。

なぜ稲荷木燈花は僕に化けていたのか。

なぜ稲荷木燈花は僕に化けていることを僕に露呈させたのか。

稲荷木燈花は僕の反応を試していたのではないか。

稲荷木燈花は僕の反応を見て愉しんでいたのではないか。

稲荷木燈花は僕を馬鹿にしていただけだったのではないか。

そして僕が引きこもってしまったら稲荷木燈火から連絡が

「香織」

誰にも化けてない、稲荷木燈花が目の前に立っていた。

燈花が首を傾げる。なんでここで会ったんだろう、という顔をしている。

普通に後樂園の駅で集合にしたのに、なんだって東京ドームの裏手に居るのかという話である。二人共、早く着きすぎて無駄に歩きまわっていたのが完全にバレバレで、笑ってしまう。

「集合場所、わかりにくくてすみません」

燈花が涼しい顔で言った。

「お茶でも飲みながら話せますか」

僕は抹茶黒糖ラテ、燈花は抹茶白玉フロートラテを頼んだ。

「来てくれてありがとうございます」

燈花がぺこりと頭を下げた。

いつものようにその豊かな髪が揺れた。

江ノ島に行ったときと同じワンピースだった。

あのときと変わらない僕たちであつたらと思った。抹茶黒糖ラテと抹茶白玉フロートラテの感想を、軽々しく話し合えたらと思った。無理やり一口飲んでみたけれど、胃がねじくれて、味も全然わからない。

「あの、香織」

「は、はい」

「緊張し過ぎでは」

「……そ、そうかな、ひ、ひさしbるいだし」

「ものすごい噛み方ですね。ローマ字入力特有の」

入力方式の話やめろ。

「どちらかという、緊張すべきは私だと思うのです」

「え」

「私が呼び出したわけで」

……まあ、そうかなと思う。僕だって燈花に連絡を取りたいと思ったし、実際何度か、メールを打ちかけた。けれど送信できなかった。

「燈花は緊張とか、あまりしなさそう……」

「いや、そんなことはないでせよ」

「フリック入力特有の噛み方やめろ」

わざとやるな。

「ええ、本当のところ、私、あんまり緊張ってしないんです」

「だろうな」

知ってた。

「けれど、だから、真剣に見えないかも知れないのですが、今日は真剣に、頑張っ話しますので、聞いてほしいのです」

そう言って燈花は、深呼吸をした。

「たくさん、謝らなければならない事があります」

まずは、何よりもまずは、香織に変身なんかして、ごめんなさい。

私は、おそらく血筋柄、人の中身が、普通の人より少しだけよく見えるようなのです。話していて、表情を見ていて、その人が考えていることが、その人の性質が、多少なりともわかります

。

けれど、香織のことは、分からない。

分からないところがあったのです。だから気になりました。もっと香織のことを知りたいと思いました。

けれど私は不安でした。香織は、私には興味なんて無いんじゃないかと。

だから香織の興味を引きたくて、あんなことをしてしまいました。嫌な思いをさせてしまったと思います。考えが足りませんでした。本当にごめんなさい。

今から考えてみれば、きっと香織の中のわからなかったところって、狼に関するところなのだと思います。香織が変身するのを実際に見てしまったあの夜まで、私はそのことに一切気づかなかったのです。馬鹿だったなと思います。

もう一つ謝らないといけないのはそのことです。

香織のことが気になって、狼のことが気になって、色々と調べてしまいました。香織をうちで手当したときに、背中のお札を見てしまいました。ごめんなさい。それについて考えて、調べているうちに、こんなに時間が経ってしまいました。香織にひどいことをしたと思っていたのに、ずっと連絡もとらなかつたのは、そっちに気を取られていたからです。香織のことを考えすぎて、香織のことを全然考えられていませんでした。ごめんなさい。すごく反省しています。

愛が重いなあ、と僕は思った。

だけど、僕は燈花の言葉が素直に嬉しかった。というか、今度こそ本当に、安堵した。同時に、意味不明な疑心暗鬼に陥ってしまった自分への恥ずかしさと、この状況そのものへの恥ずかしさが無いまぜになって、かっと身体が熱くなった。

「みとはちさんに言われてしまいました」

直接話さないといけないって。『一目見れば』の妖狐じゃないんだって。

そうなんです。私には他人を知悉することなどできず、知悉されることもできない。言葉で伝えないと、伝わらない。

だからそもそも、はじめから、香織のことが気になったということから、伝えないといけない、そうして謝らないといけない、そう思いました。『一目見れば』の妖狐の話、都市伝説になっていたのが面白くて、なんだか私もそれにとらわれていたというか、調子に乗っていたのだと思います。そんなこと、無いんです。そんな都合のいいこと、ありませんでした。知悉したりされたり、私たちは出来ないんです。私たちの場合は、伝えなければ伝わらない。

「だから……だから、私は、香織ともっと話がしたいです。また、今までとおんなじに、仲直り、できませんか」

そこまで言う頃には、僕はもう燈花の顔なんて見られなくなっていた。抹茶黒糖ラテの氷がズルリと滑り、上に載っているクリームが抹茶に浸かる。

「うん、僕こそごめん、怒ったりして」

やっとのことで、それだけ言った。

いやいや、それだけじゃダメだろと思った。

「あ、あのさ」

僕は携帯を取り出して、例のリストを上からなぞった。

「行ってみたいUがあるんだけど」

燈花がにこりと笑って、首をかしげた。

ああ、僕はダメだな、こうやって逃げて。確かに仲直りしたら行きたいところはたくさんあった。それを準備していたし、そのことも伝えたかった。けど、燈花がこれだけ話してくれたのに、僕はなんにも言ってないじゃないか。僕の気持ちのことを。

けれど、燈花が笑ってくれただけで嬉しくなって、心臓が変な方向にねじれそうで、それ以上言葉が出てこなかった。

「駄目です」

燈花が言った。

え？

「今日この後行くところは、決まっているんです。おうどんさんは別の日にしましょう」

「……え、そうなの」

「はい」

燈花はそう言うと、白玉をつつきはじめた。

「ちゃんとコースを考えてあります。途中途中にいい感じのポイントもたくさんありますから」

最後に展望台で夜景を見ます。やっぱりクライマックスですし、そこがおすすめだと思いますけど、と燈花は言った。

「香織も、ちゃんと言葉で聞かせてください」

いつもは眠そうな瞳が、輝いて揺れていた。

僕を捕まえて離さなかった。

家に帰った私は、母にこの顛末を話しました。クライマックスは皆まで言いませんでしたが。

そうしたら晩御飯がいなり寿司になりました。神。

「……どうしてスカイツリーだったのじゃ？」

「お父さんに聞いたんです」

そう言うと母は、ふうんという顔をして、何も言いませんでした。父によると、二人がかつて喧嘩をした時に、仲直りした場所が東京タワーだったのだそうです。だから私は真似をしてみました。

「まあ、仲直りできたのなら良かったの」

「それでお母さん」

「ん」

「お願いがあります」

「そう言うだろうと思ったわ」

「お願いします」

「分かっておる。娘の大切な友達のことじゃからなあ、儂も一肌脱ごう」

お願いの内容を言わなくてもお願いが済んでしまう。私は、この親子関係にも問題があったなあ、少し思いました。

けれど、母が協力してくれるのなら安心です。一件が落ち着くまであと少しだと、私は思いました。

携帯電話が震えています。

非通知設定。

私は普段非通知の着信を受けたことなんてありません。

「もしもし」

「燈花。僕だよ。頼みがある」

それは、香織の声でした。

「もう夕方になるのに悪いけれど、少し来てくれるかな」

そう言って香織が指定したのは、香織の家の近くの、私も知っている場所でした。

*

逢魔が時、というにも少し遅い、薄暗がり。

「夜遅くにごめん」

ベンチに腰掛けていた神谷内香織は私を見て立ち上がり、言いました。

「頼みって何ですか、こんな時間に」

日は長くなりつつあります。それでももう少しで完全に沈むでしょう。

「現場検証がしたくてね」

「現場検証」

「宿題といってもいい」

「宿題」

「今回の一件に関して、残りの宿題だよ。ここで僕が撃たれたわけだけれど。この辺りかな？」

そう言って香織は、ちょうどあの日、私に飛びかかったあたりに立ちました。

「角度がどうだったかを教えてください」

「角度ですか……」

「どちらから撃たれたか」

私は、私が倒れていた位置に移動します。

「ちょうど私がここにいる、こう見上げる形で、その時に香織の肩を弾が通りました。でも撃たれた角度まではわかりません。血はこう、こちらへ噴き出したのを覚えてますが」

香織は真剣な顔をしてそれを聞き、周囲を見渡しています。

「どこから撃たれたかを考えているのですか」

「そうだね」

私も振り返って見渡します。

この公園は坂のなかばにあり、上の段と下の段二つにわかれ、我々がいるのは上の段です。私

の背後にはある程度開けた景色が広がっており、公園の向こう側にある民家のどれかが、狩人が猟銃を構えていた場所として考えうるといえるでしょう。

むしろあの瞬間私が振り返って後ろをみる余裕があれば、たちどころに狩人の居場所が知れたのではないかと思います。いや、それもかなわなかったでしょうか。あたりは暗かったですから。

頼みというのはなんなのでしょう。ここで狩人の正体について検討するということなのでしょう。

もちろん私も狩人の話が気にならないわけではありません。しかし、先程母にお願いをしました。母がいれば、それに藤木先生も帰ってくるとなれば、この問題はいずれ解決できるだろうと私は期待しています。だからここで、私達が勝手に動くべきではないのではないかと、というのが私の直感でした。

あたりは大分暗くなってきました。しかし、それでも街は所詮街であり、その明かりは結構なものです。街頭の明かり。民家の明かり。公園の明かり。私は夜目も普通の人間よりも効くようですし、これなら狩人がどこからか狙っていれば見分けられます。

そのはずでした。

私は最初、立ちくらみか何かかと思いました。

音もなく、光が消えていきます。

「なに、これ……」

香織のつぶやきが、光とともに消えていくようです。

街が一角一角、スイッチを切るように、光を消していきます。

「停電……？」

そんな停電があるのでしょうか。まるで送電経路を一つ一つ落としていくように、街が切り取られ、明かりを失っていきます。

最後に残った公園の白い電灯が消え、あたりは闇に落ちます。

「香織？」

香織の姿ももちろん見えなくなります。

「香織？ どこですか？」

月明かりはありますが、さすがにまだ目が慣れません。

と。

香織の姿が浮かび上がりました。

赤い光の点によって。

一つ、また一つ、赤い光の点は次々に灯り、香織の胸で揺れます。

「なん、これ」

胸騒ぎと、私が叫ぶのと、ほとんど同時でした。

頭を割る爆音が鳴り響く。

一瞬の不快な沈黙の後、街の明かりが一斉に灯ると、一瞬前まで神谷内香織であった肉の塊が、地面に転がっているのを私は発見する。

(第三部につづく)

参考文献

狼の民俗学一人獣交渉史の研究 菱川晶子（著） 2009 東京大学出版会

室生犀星詩集 室生犀星（著）、福永武彦（編） 1968 新潮社

石川県の民話 日本児童文学者協会（編） 2005 偕成社

第三部

第三部『三ト八恵は知りたくなかった』はこちら

<http://p.booklog.jp/book/118109>